

と理會した者があつた。故に兒童の精神内容に就いて充分調査せねば、彼等が正しく理會したかどうかは、容易に分らぬ。精神検査 *Mental Test* はかういふ場合にも必要である。斯く兒童は、新なる事物に接する時、悉しく觀察せず、又其の特徴に注意せず、唯、其の狭き經驗に於て見聞した既知の事物と比較し、皮相であり、且つ部分的である類似點を見て、直ちに之を類化する傾向がある。是れは必ずしも兒童に限つたことでは無い。教育が缺け經驗の乏しい者は、成人と雖も、同様である。されば新事物を教へる時には、すべて輕々に之を既知の經驗に關係させてはならぬ。それは、不正確なる觀察と、皮相の類化とを助長し、將來に非常な惡影響を残すからである。

思想言語及び文化 *Thought, Language and culture (Gedanke, Sprache und Kultur)* 音聲、形狀、運動等の助を假りて、自己の思想感情等を表出するのは即

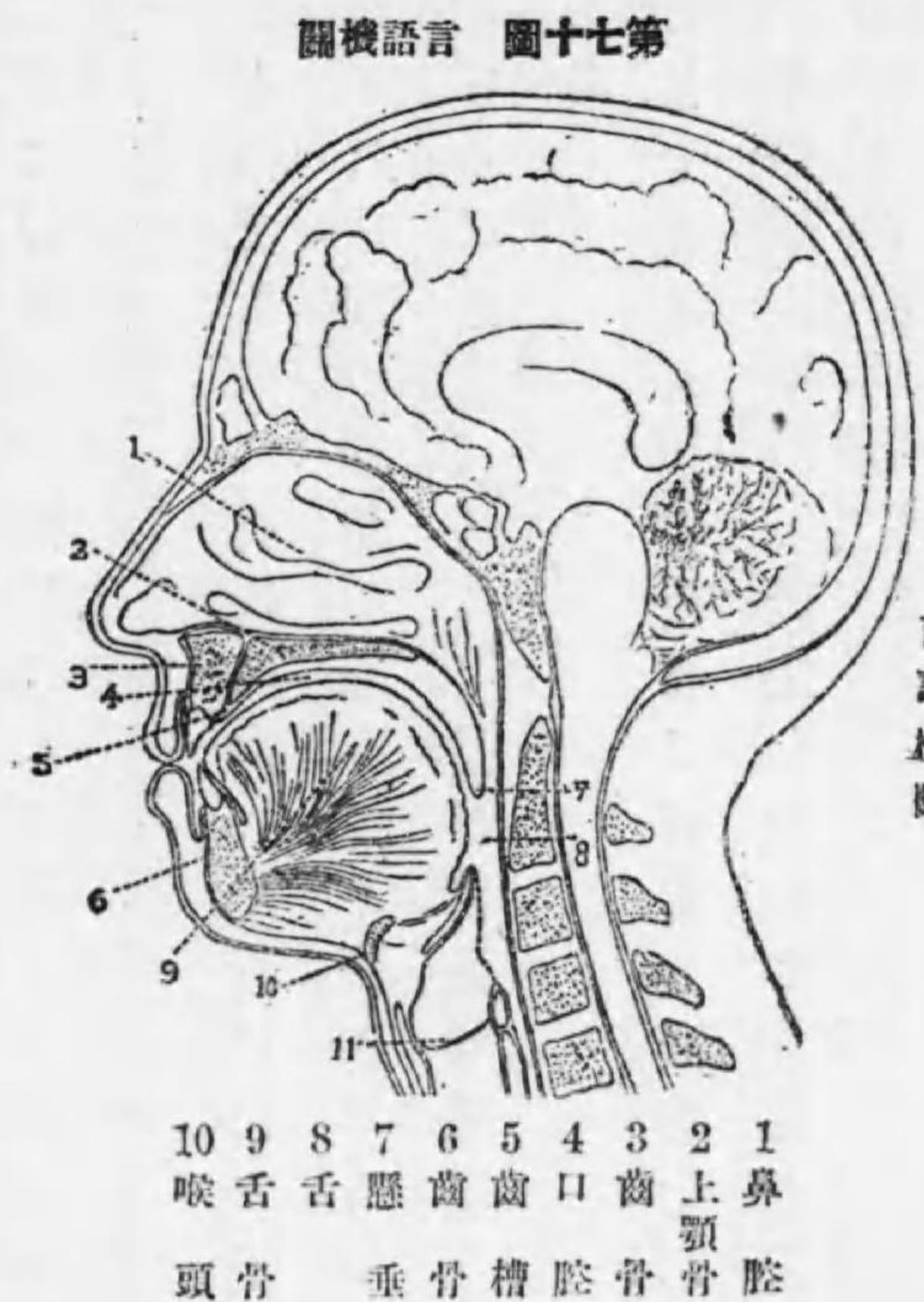
ち言語である。言語の萌芽とも見る可きものは、動物の間にも存するけれども、言語は人類に至つて、最も高い發達をなして居る。人類が生物中最高の理智を有するのは、種々の原因があるであらうが、其の主要なるものゝ一は、言語の完全なる事である。蓋し言語は常に現在直接に、各自の思想感情を交通し得るのみでなく、又之を文字に記して、後世に傳へることが出来るので、後人は、之に由つて、よく先人の智識經驗を繼承して、更に文化の發達を圖り得るのである。若し人類社會に言語が無いと、假令有つても不完全であつて、且つ文字が無いならば、各個人の經驗は、一代で消滅し、後代の者は、更に先人と同一の經驗を反復せねばならぬので、進歩は永遠に期せられぬであらう。動物が人類の如くに進歩せぬのは、種々の理由もあらうが、動物に言語文字の無い事が有力なる理由の一である。されば人類今日

の文化は、實に言語の賜であるといつてもよい。

言語は、全精神作用と關係して居るけれども、就中密接の關係があるのは、思想である。低級なる思想作用は、今日吾人が用ゐて居るやうな言語は無くとも、よく行はれる。併し乍ら、少しく高い思想は、到底言語無くしては行はれぬ。蓋し言語と思想とは、互に相待つて發達し、思想があれば言語があり、言語があれば思想が之に伴ふを常とする。動物に完全なる言語を缺くの主なる理由は、其の思想を缺くが爲である。人類に在つても、内容の精確なる多くの言語を有する者は、其の思想の豊富なることを表明し、之に反する者は其の貧弱なることを表明する。言語は、斯く思想と密接なる關係のある爲に、動もすれば、内容の空虚なる言語が行はれて、吾人を惑はす事がある。是れは警めねばならぬ。

言語の種類 言語を廣義に解する時は、思想感情等を發表し得るものは、皆其の範圍に屬せしめることが出来る。故に身振(手眞似)(Gesture) (Gebärde, Gestes) 顔容等による種々の運動も亦一種の言語である。

言語機關



之を(一)身振語 (Gesture)

Language (Gebärden Sprache)

といふ。身振語は、人類發達の初期及び個人の嬰兒期に於ては、盛に行はれるけれども、到底精密なる精神内容を表出するに適せぬ故、文化の進むに従ひ、次第に廢れ

第十七圖 言語機關

て僅に音聲語の補助として行はれるやうになつたのである。

(二)音聲語 Vocal Language (Mundlichsprache) は、吾人が普通に言語と稱するものであつて、聴覺に由つて行はれる。人類の音聲は、他の動物に比すれば、其の種類が頗る多く、複雑であつて、各種の思想を自由に表明するに適して居る。是れは、發聲機關の最もよく完備せるが爲である。

第七十圖は、人類の發聲に要する機關を示したものである。音聲語が身振語に優つて發達したのは、音聲が言語の手段として、種々の便利を有するが爲である。

(三)筆記語 Written Language (Geschriebenes Sprache) は、一定の徽號を用ゐて、音聲語を寫したものであつて、視覺を以て聴覺に換へたのである。是れには、繪畫や、文字や、其の他の徽號がある。結繩 Quipu もその一

である。就中主として用ゐられたのは文字 Letter (Buchstabe) である。文字にも、象形文字 Hieroglyphics 表音文字 Phonograms. 等種々の別があるけれども、何れも音聲語の一時に消滅する缺陷を補ひ、吾人の思想を永く留めて、他に傳達する爲に用ゐられる。

言語の發達 吾人は、生れながらにして、自己の思想感情等を表出せんとする、衝動を有して居る。感覺機關が刺激に接すれば、之に應じて種々の運動を生ずるを以ても、之を察することが出来る。就中、是等の表出手段として、最初に用ゐられるのは身振 Gesture である。初生兒の亂雜運動 At random Movement も亦一種の表出に外ならぬ。之に伴つて生ずるのは、發聲 Ejaculation である。發聲は、主として有機感覺に伴ふ感情の表出である故、嬰兒の最初に發する音聲語を(一)情調語 Tone Language といふのである。生後數月の間は、母音、及びマ・バ・パ・

ダ等の發音し易き音を、無意義に發するに過ぎぬ。是等の發音は、必ずしも感情の表出には限らぬ。單に發聲機關の遊戯たる場合が多い。此の場合には、各種の音を反復して亂雜に發音する。之を(二)喃語 Babbling といふのである。

斯くして、生後一年前後に達すれば、盛んに各種の發聲を模擬する。之を(三)擬似語 Onomatopoeic といふ。犬・猫・鼠等を呼ぶに其の鳴聲を以てするの類である。又この頃より、一般に成人の語を摸倣せんとする傾向を生じて來る。二年前後に至つて、特に盛である。此に至つて、初め個人的に起つた言語は、社會的發達をなすの基礎を得るのである。凡て言語は社會的生產である故、兒童の場合に在つても、朋友及び成人との接觸に由つて、次第に發達するのである。成人の言語を模擬するのは、即ち語 Word (Wort) を理會し、句 Sentence (Satz) を習

得する所以である。兒童は、生後一年乃至三年の間に、よく其の母語を習得し、彼等の生活に不便を感せぬやうになるのを常とする。以上は主として、音聲語の發達を述べたのであるが、筆記語の發達は、之より後れ、通常學齡期に入り、教育に由つて初めて之を習得するのを常とする。讀方・綴方・書方は、此の語の習得に必要な手段である。言語教育 初歩の教育には、種々の教課があるけれども、教授上主要なのは、思想の手段である所の讀・書・算の三科に熟せしめることである。さうして何れの教課も、言語に由つて習得せられぬものは無い。之を以ても、言語の教育上に於ける地位を察することが出来る。されば幼時より、精確に上品に談話せしめる事と、其の内容を豊富ならしめる事とは、教育者の特に意を用ゐる可きことである。言語が思想表出の必要上より生ずることを察すれば、兒童をして、話方に習熟

せしめる爲には、先づ彼等に、思想を得しめねばならぬ。其の思想を養はずして、唯其の表出に努めるのは、本末を誤つたことである。斯る教育は徒らに口舌の人を作るに過ぎぬ。綴方に於ても、亦その通りである。彼等の精神内容さへ豊富ならば、之を表出せんとすの衝動は、自ら強く動いて、作文も容易に綴れるであらう。讀書は、教育上殊に必要な手段である。讀書には、視覚・聽覺を要するのは勿論であるが、發聲機關の運動にも亦複雑なる作用を要する。又其の意義を理解するが爲には、聯想・記憶・類化等の諸作用と共に、思想作用を必要とする。通讀して直ちに之を理解するは、是等諸作用の同時に行はれるに由ること、頗る複雑なる練習を経ねばならぬ。教育者は、是等の過程を考へ、習熟せる成人の精神を以て、幼弱なる兒童を律することなく、讀書の教授には、特に意を用ゐる可きである。

數 Number (Zahl, Number) 數は思想する上に、極めて大切なる部分を働く。特に精密なる思想は、數に待つことが多い。哲學に於ては、數を先驗的概念であると説く。併し乍ら、心理學上より數概念の開發する狀を觀察すれば、一般の概念の形成と異なる所は無い。初は感覺・就中視覺に訴へて、個々を辨別し、且つ一個と數個との別を知る。これは感覺的數である。次には手指を以て自然數を反復し、その順序を記憶する。是れは表象的數である。斯くして之を自然物に試み、次第に反復する間に、抽象的系列を意識的に作り得るに至り、終に之を記號に由つて代表するやうになる。これ即ち概念的數である。一般に思想の要件として、科學・就中精密科學 Exact Science (Exakte Wissenschaft) の成立に必要な數は、即ち最後の概念的數である。數觀念の成立に關して、古來直觀主義と數へ主義との論争があるが、これ

は双方の干與して居ること、一方のみに由つて出来るのでは無い。思想と信念 Thought and Belief (Gedanke und Glaube) 信念といふことを最も概括的に廣義に説明すれば、眞實であると思ひ定めて、疑惑の無い心の状態である。斯ういふ心状は、どうして出来るかといふに、幼時に在つては、感覺をその儘受け容れる自然の傾向がある故、一點の疑を挟む事をせぬ。之を兒童の輕信性 Credulity (Leichtgläubigkeit) といふのである。併し、この場合に於ては、眞實とか虚偽とかいふ判別は付かぬので、唯感覺に印象せられるまゝを感受して居るのである故、嚴密の意味に於ける信念とは言はれぬ譯である。それより、兒童が次第に成長して、心身ともに種々の経験を重ねるに従つて、意識に表現したもの、又は感受したものが、必ずしも、確實に客觀に存在しなかつたり、一度経験したものを、再び反復しやうと思つ

ても出来なかつたりするので、その意識に種々の矛盾が起り衝突が生じて、終に疑惑といふ心状も生じて來るのである。併し、多くの経験の中には、幾度反復しても同一の結果が得られ、主觀的事實と客觀的事實とが一致して、所謂客觀的妥當性 Objective validity (Objektive Gültigkeit) が確實であるものがある。之に對しては「間違ない」眞實であるといふ堅固な安定した心状が生ずる。この心状は疑惑の正反對である。初めは、一々自己の経験を經て、かういふ心状を得たのであらうが、後には一々經驗せずとも、或経験を本として、或事實に對して斯ういふ心状を生ずるやうになる。是れが廣い意味の信念であつてこの心状は思想の働にも大切である。

元來信念は、思想した後、就中判斷した後、最も確實になるものである。即ち自己が相當の理由に由つて斷案を下した事項に對しては、間違

ない眞實であるといふ信念が起るのが當然である。この點に於ては、信念が思想に由つて助けられるのである。併し又、思想する初に於ては、廣義の信念なくしては出來ぬことである。思想するには、表象を要し概念を要するが、是等の心象を初より疑つては、思想を進めることは出來ぬ。假令、明に意識せずとも、吾人は、その意識の根柢に表象も概念も、間違ない眞實であるといふ信念が存在して居るのである。この點より見れば、信念は實に思想の根柢をなすともいへる。信念の一層狭く、或る限られたる對象に働き、而かもそれに多くの感情的要素の加はる時は、之を信仰 Faith (Glaube, Foi) といふ。この語は主として、宗教に用ゐられるが、それは即ちかゝる精神状態が、宗教に於て最もよく認められるからである。信念に於ては、通常理智の上に、合理的經驗の上に、この心狀が成立するのであるが、宗教に於ては

「不合理なるが故に信す」Credo quia absurdum est といふやうに、理智を超越して、その確信が成立することがある。否寧ろかゝる心狀が、宗教的信仰の主要素であるともいへる。併し又、かゝる場合には、通常の理智作用たる思想、就中判断の如きは、殆んどその力を失ひ、所謂迷信 Superstition (Aberglaube) に陥る虞がある。勿論、現在不合理として居る事を信するものが、皆迷信ではない。吾人の理智は、極めて淺小薄弱のものである。現在吾人の不合理と判定したものが、他日何んぞ合理的たること無きを知らんやである。故に宗教的信仰は、本來個人的、主觀的のものであつて、思想の公共的客觀的になると、必ずしも一致するものではない。

されば、宗教的信仰の如く、感情的、意志的要素に富める心狀を以て、公平無私、何等の偏傾なかるべき思想作用に臨むのは危険である。科

學哲學の如く、純粹理智的作用に徹底せねばならぬものは、努めて信仰の影響を避けねばならぬ。

考案

- 一 思想作用の説明。
- 二 類化の説明。
- 三 兒童の類化。
- 四 言語の定義。
- 五 言語と文化との關係。
- 六 言語と思想との關係。
- 七 言語の種類。
- 八 言語發達の過程。
- 九 言語教育上の注意。
- 一〇 數と思想との關係。

一一 思想と信念との關係

第二十章 概念・判斷及び推理

(甲) 概念 Conception (Begriff) 吾人の精神生活は、日々の經驗に由つて、其の收受する表象の種類の数も漸く多く、且つ、同一表象を屢々反復するに至るであらう。斯くして其の許多の表象の相似たる部分は、重復して經驗する故に、益々顯著なると共に、類化作用に由りて、統一せられ、終に一種の概括的表象を形成する。之を概念といふのである。故に概念を形成するには、二箇以上の表象を経験せねばならぬ。さうして其の表象形成の要素に就いて、相似ざる部分は相似たる部分と反對に、互に禁止作用を爲し、随つて其の再生傾向も亦薄弱なるが爲に、是れは脱落して(捨象)相似の部分のみが残つて(抽象)概括せられ



るのである。故に表象は具體的 Concrete であるけれども、概念は抽象的 Abstract である。表象には之に適合する客觀的對象があるけれども、概念には之が無い。吾人の思想は、主として、概念に由つて行はれる。

概念の構成 概念の構成には(一)觀察 Observation (二)比較 Comparison

(三)抽象捨象 Abstraction (四)概括 Generalization (五)命名 Naming の五階級がある。例へば甲の馬にも非ず、乙の馬にも非ずして、唯廣く馬と云ふ心象を形成するが爲には、先づ甲・乙・丙・丁等の馬に就いて、充分に觀察し、且つ、是等を互に比較せねばならぬ。斯くする時は、必ず、互に相似たる點と、然らざる點とを發見するであらう。さうして、其の似ぬ點を捨象し、似た點のみを抽象して、之を一に概括する。斯く概括した心象に、馬といふ名稱を付けるのは、即ち命名である。是等の過程中

比較は關係を發見する作用であつて、概括は、類化の作用である。

概念の階級 吾人は先づ形ある概念を作り、次第に進んで形無き物に及ぶのを常とする。例へば犬といひ馬といふのは、共に概念であるけれども、是等のものには、略々同類の型式 Type がある。進んで、之を概括して、獸類といふ時は、形を以て現はすことが、漸く不完全になるけれども、猶代表すべき型式がある。是等の階級に屬する物を普通觀念 General Idea 總念 Notion 又は型念 Typical Idea と名づける。一層進んで、動物といふに至つては、全く形を以て現はすことは出來ぬ。更に生物といひ、物といふに至つては、抽象の度が、益々高く、言語(名稱 Word, Term)を以てするに非れば、到底、之を現はす可き方法は無い。故に、言語なくして、意識に現はし得可き概念は、低級であつて、必ず之を要する物は、高級であると言ひ得る。

内容及び外延 若し茲に人があつて、吾人に問うて「犬とは如何なる物か」と言うたならば、吾人は之に答へて「四箇の足と一個の尾とを有して居て、毛皮で蔽はれ、一尺乃至三尺の高さにて、鼻の尖つた家畜である」といふであらう。是れ即ち犬といふ概念に、以上の事項が包含せられて居るからである。之を概念の内容(Content)(Inhalt, Contenu)といふのである。さうして此の内容を有して居る犬の概念は、之を何れの時、何れの國の犬にも適用することが出来る。之を概念の外延(Extension)(Umfang)といふのである。今若し犬といふ廣い概念に冠するに、日本の二字を以てしたならば、其の内容は、日本の犬に特別な性質が加はつて、其の數を増すであらう。併し乍ら、外延は、我が國の犬に限られて、其の他に及ぶ事は出来ぬ。故に、外延の大小と、内容の大小とは、其の關係が反比例(Inverse Proportion)をなすのである。

兒童の概念 兒童の幼稚なる間は、概念の作用が充分に行はれずして、僅に低級概念の形成せらるゝのみである。又兒童と成人とは、經驗を異にし興味を異にして居る故、同一概念の内容も、異つて居ることが少くない。概して、兒童の概念は、其の内容が貧弱であつて、不完全である。兒童が最も興味を有するのは、事物の用及び運動等である故、是等を以て、内容とする場合が多い。例へば、筆は「文字を書く物」、時計は「時を計る物」、鳥は「飛ぶ物」、車は「走る物」といふの類である。併し乍ら、年齢が進み、智力の開けるに従つて、其の内容も漸く豊富になり且つ、完全に進んで来る。一般に、兒童の智識の程度は、概念の内容如何に由つても判定せられる。

概念の必要 吾人が唯數冊の書を藏して居る間は、箇々の書名を別々に記憶して居り、且つ、其の所藏の場所や位置をも諳んじて居るこ

とが出来らるであらう。随つて特に之を分類する必要も無い。併し數百冊若くは數千冊の書を藏するやうになれば、之を適當に分類して、或は書架に排列し、或は書匣に收納し、其の目録を製して内容を明にする等、整頓に努めねば、其の搜索に不便である。

吾人が經驗を積み、智識を増すに従つて、概念を要する事も亦之と同様である。概念は、箇々の同種類である具體表象を統合して、之を一の名詞で代表させるのである故、大に精神作用を簡單化して記憶に便利である。是れ宛も、一の書匣に、多くの同種類の書を容れて置くと同様である。是れが概念の效用の(第一)で、精神作用を敏活にすることである。又一概念中に含まれた多くの表象には、必ず、通有の性質がある故、一概念の内容を知れば、之と共に、多くの表象の性質を知ることが出来る。是れ即ち概念の效用の(第二)であつて、精神作用が

經濟的に行はれるのである。又(第三)の效用は、概念に由つて推理作用の行はれることである。

最後に概念の效用の(第四)として擧ぐべきは次の事である。及そ吾人の智識は、概念を外にして進歩することは出来ぬ。科學も哲學も概念作用に由つて成立する。さうして、又是等學問の目的は、吾人の概念を完全ならしめるに在るのである。ヘルバルト Herbart は、哲學の職分を経験的概念の修整 *Die Bearbeitung der Erfahrungsbegriffe* に在りとした。

**概念の基礎** 此の如く、概念は吾人の智識を高めるに必要なものである故、之が教育には特に注意せねばならぬ。被教育者に、正しい概念を與へる爲には、先づ其の内容となる可き感覺・知覺・表象等を正確ならしめ、一概念の喚起せられる毎に、其の内容をして、明に意識に現

れしめねばならぬ。若し然らずして、内容の無い概念(名稱)を強ひて記憶せしめるやうな教育は、全く心理の法則に背いたものである。斯る誤謬は、修身科の教授に於て特に多い。例へば、仁義忠孝の如き無形名詞に屬する多くの徳目を教へて、其の内容を疎にするの類である。是れ即ち、學校教育に於て、修身科が、重きを置かれて居るにも拘らず、其の効果を收めることの少ない理由の一である。

すべて概念の基礎は(一)具體的經驗を以て第一とするが、なほ(二)概括が或る限られたる少數の事實に基いたのでは薄弱である故、出来る丈け多方面に涉つて完全の材料よりせねばならぬ。又(三)一の概念が他の概念と確然區別せられるやうに注意せねばならぬ。これには(四)概念を構成する時、抽象概括する要素の選擇が必要である。

具體的觀察 學校教育に於ける教科は、修身科たること又一船智識的

教科たることを問はず、一の概念を與へる爲には、必ず其の構成法に従ひ、先づその内容を具體的に示し、次第に進んで、抽象概括し得られるやうにせねばならぬ。元來、人の賢愚は、其の概念内容の精粗に由ることの多いものである。例へば、同一名稱で呼ぶ魚といふ概念も、智識の乏しい者の有する内容は、唯日常眼に觸るゝ四五の魚類に止まるが、専門家の概念内容には、無数の魚類を包含して居るの類である。故に、兒童に、概念を與へるにも、其の發達の程度を計り、次第に内容を精密ならしめねばならぬ。又概念の階級に注意し、先づ總念より、次第に進んで、全く抽象したる高級の概念に及ぼす可きである。

概念と教科 概念の練習は、何れの教科でも出来るが、特に之に適當なのは、直觀教授(又實物教授) Anschauungsunterricht を用ゐる教科である。直觀教授は、具體的觀察に基くが故に、概念の基礎を養ひ、且つ其

の作用を練習するに適する。随つて理科は、概念の練習に、最も必要である。又作文、修身科等に於ても、之を練習することが出来る。

教授の目的 教授は、智識 Knowledge (Erkenntnis, Connaissance) と技能 Ability (Fähigkeit, Habilité) とを與へるのを目的とする。さうして、智識は、概念に由つて成立し、技能も亦、概念の指導に由つて進む。されば、教育者は、其の智識科たるを技能科たるを問はず、常に被教育者をして教へる事項の正確なる概念を得しめん事を期すべきである。

(乙) 判断 Judgement (Urteil, Jugement) 吾人が或る客觀的對象を経験してその何たるかを知るのは、知覺(直觀)作用であるが、又一種の原始的判断 Initial Judgement である。何故といふに、知覺は畢竟過去の經驗表象と、現在直接の對象との比較類化に由つて行はれる、無意的判断であるからである。故に判断は、智力作用の初歩より存するけれども

上述の如き場合に在つては、特に自ら判断したとの意識なくして行はれるのを常とする。是等の作用をすべて直覺判断 Intuitive Judgement といふ。然るに思想階級に屬する判断は、明に自己の意識に由り、思慮して行ふのである故、之を思慮判断 Deliberative Judgement と名づけ、或は之を言語に現はす故、表出判断 Explicit J. といふ。是れが判断の本質であつて、思惟 Thinking (Denken, Pensée) の最も簡單なる形式である。思慮判断は、思想作用中、重要な地位を占めて居る。知覺の場合に、直覺的に行はれた判断は、個人的意義を有するに過ぎぬが、思慮的判断は、普遍的意義を有する。元來判断とは、二個の概念(又は表象)を比較して、其の間の關係を定める作用であつて、之を言語文字に現はしたものは、論理學に所謂命題 Proposition である。例へば、兒童が「雀」といふ概念と「鳥」といふ概念とを關係せしめて「雀は鳥である」と

いふのは文法上では句 Sentence であり、論理上では命題であり、心理上では、即ち判断である。此の如く、判断作用は、言語に由つて明瞭となる。之を以ても、思想と言語との關係の密なる事を察することが出来る。

**判断作用** 判断作用は、通常次の五つの過程に由つて行はれる。(第一)は認識である。即ち判断の對象となるものを明かに認めねばならぬ。(第二)は、分離である。是れは、對象の屬性から、或る要素を分離して考察するのである。(第三)は、分離したものを再び接近させる作用である。即ち認識した對象と分離せしめた屬性とを、接近關係せしめるのである。(第四)は、その二つの概念(又表象)の契否の直観であり(第五)は、判断の主要性たる決定 Decision (Entschluss) である。判断の性質 概念に包含せられた屬性 Attribute を分解して、明瞭な

らしめる點より言へば、判断は分析的 Analytic に作用する。例へば「鐵は重い」といふの類である。之を分析判断又は解説判断 Explicative (Erläuterungs) といふ。之に反して「鐵は藥劑として用ゐる」といふが如きは、鐵に固有の屬性を分析したので無くして、他の關係から知られたものを附加したのである故、此の判断は綜合的 Synthetic に働いたのである。之を綜合判断又は擴充判断 Ampliative (Erweiterungs) といふ。凡て判断は、是等二種の作用に由つて、吾人の經驗に秩序を與へて、益々明確ならしめる。

**正確判断の諸條件** 判断を正確ならしめるためには、少くとも左の諸條件を必要とする。(第一)は判断すべき對象の充分なる認識である。換言すれば概念が正確で無ければならぬ。(第二)は適當なる時間の経過である。是れは、特に、判断に限つた事ではないが、時間の缺

乏の爲に判断を誤ることは特に多い。(第三は充分に思慮することである。是れは固より第二と關係して居ることであるが、いくら時間があつても、思慮を盡さねば正確なる判断は得られぬ。(第四は偏見を去り対象の各方面を考察することである。すべて、純粹なる理智作用の活動を自由ならしめる爲には、情的要素を捨て去らねばならぬ。それは正確なる判断を得る爲に特に必要である。

**判断と教育** 教育に活氣あらしめるが爲には、何時も被教育者を導いて、自ら判断せしめる事が必要である。蓋し、教育者には、熟知せられた事項も、被教育者が自己の智識より判断した時は、宛も吾人が一大発見をなしたと同様な愉快を感じるのである。此の如くせしめる爲には、前にも、屢々説いた如く、被教育者既知の事實に基いて、多少の思慮を費せば、理解し得可き程度の問題を與へて、絶えず彼等に自

ら判断するの習慣を得しめる事が必要である。

**判断と教科** 判断も亦概念と同じく、あらゆる教科に於て練習することが出来るけれども、習字及び圖畫は、最も簡單なる練習法である。蓋し與へられた手本と、自己の書いた物とを比較して、其の異同を決定せしめるのは、即ち一種の原始的判断作用に外ならぬ。手工及び遊戯も、此の練習に適して居る。又兒童に作文せしめ、若しくは、既に教へた事項を語らしめるのは、分析判断作用の練習に適し、理科を授ける場合、並に數學の説明の如きは、綜合判断作用の練習に適する場合が多い。教育者は、適宜に之を應用して、一は舊智識の内容を明晰ならしめ、一は新智識の範圍を擴張せしめねばならぬ。

**疑問の活用** 凡そ、疑問 Interrogation (Frage) は、判断作用の生ずる根元であるが、兒童には、好んで種々の疑問を發する傾向がある。若し、教

育者が、此の傾向を巧に利用し、被教育者を導いて、日常の経験にも疑問を發せしめ、奮つて正當に之を解釋せんとの衝動を強からしめるならば、判斷作用の練習を助ける効果が少くないであらう。

(丙) 推理 Reasoning (Schluss, Raisonnement) 複雑なる事項は、唯、二箇の概念の比較に基いた判斷に由つては、決定し難いことがある。是に於て推理と名くる、複雑なる判斷が生ずる。加之、吾人には常にあらゆる事項の理由と歸結とを求めて止まぬ自然の求智的傾向がある。それ故、一つの判斷に對しても、何故かゝる斷定をするかといふ理由を求め。これが又、推理作用の行はれる所以である。要するに、判斷に理由を附加したのが推理である。故に推理は、既知の経験に基き未知の事項を推度する作用であつて、二箇或は二箇以上の判斷の關係を定めることに由つて成立する。例へば「總て金屬は熱に熔解す

る」といふ判斷と「鐵は金屬である」といふ判斷とを關係せしめて「故に鐵は熱に熔解する」といふ斷案(歸結又結論) Conclusionを下すの類である。之を論理學で三段論法 Syllogism といふのである。則ち推理の形式(推測式)である。

推理の種類 論理學の區分に從へば、推理式に、歸納法と演繹法との二種がある。今その心理作用を述べれば次の通りである。

(一) 歸納法 Induction 同様な事項を、多くの同様な場合に、経験する時は、總ての場合にも同様であらうとの確信 Conviction (Überzeugung)を生ずるに至るものである。曾て四年三ヶ月の一男子が、己の父も、從兄の父も、朋友の父も、夏期に旅行したのを經驗し「父は皆夏に旅行するものである」との斷案を下した事實がある。此の如きは即ち一の歸納作用に外ならぬ。



併し乍ら、是等は、唯、人の意識の性質上自然の形式に従つたのみのものであつて、其の斷案の誤つて居ることは勿論である。眞の歸納推理は、精密なる觀察(經驗)と實驗とを重ね、充分に思慮し、確實なる根據を得て、始めて、全體の判斷を下すのである。歸納法の一般的性質を云へば、特殊の事實を總合して一般の原理法則 Principle Law を設定する作用である。蓋し人類にかゝる推論の作用が、自然の過程として行はれ、教育經驗に由つて益々確實に進むといふのは、その意識に因果律 Causality (Kausalität) を肯定する傾向があるからである。即ち、吾人は如何なる事も、原因なしに起ることはない。結果があれば、必ず原因があり、原因があれば、又必ず結果があるといふ堅い假定の上に立つて居るものである。之と同様に、吾人は又、萬有齊一律 Uniformity of Nature (Gleichförmigkeit des Naturlaufs) を假定する。即ち自然は、それ

に異つて居るけれども、又その異つた所を取り去れば、同じ條件の下には、何時も同じ結果が得られるといふことである。以上二つの假定がよく歸納推理を可能ならしめるのである。

**歸納推理と教育** 一般に、理科の教授には、歸納法を用ゐる場合が多い。例へば、理化學の教授に、先づ實驗を施し、生徒をして、精密に觀察せしめ、且つ其の結果を判斷せしめるが如き、或は博物科に於て、同種の動植物數種を觀察させ、其の必要な類似點を抽象して、一般の法則を發見せしめるが如きは、何れも歸納法の應用である。凡て被教育者の幼稚なる程、教授には、歸納的方法を用ゐるを可とする。

**(一)演繹法 Deduction** 五年二ヶ月の一男兒が曾て、或る教師の屋根より落ちて負傷した話を聞いた。後、此の兒に對つて「教師にならぬか」といふ者があつたら、之を否んだので、其の故を質したら「教師になる

と屋根から落ちるから」と答へたことがある。是れ、此兒は「教師は屋根から落ちるものである」との命題を、教師全體に關する事として、斯る斷案を下したのである。凡て一般の法則を應用して、特殊の事實に判斷を下す作用を演繹法といふのである。故に演繹法は、歸納法と正に相反して居る。併し乍ら、右に挙げた例の如きは、前の歸納法の例と同様に、唯其の形式の演繹的なるのみであつて、其の推論は、固より誤つて居る。唯人の心には自然に或る種の確信を作り、之に基いて未經験の事を判斷する傾向のあることが之で分る。一般に推理作用に於ては、其の形式は、完全であつても、内容の不完全なるものは、誤謬たることを免れぬ。故に演繹法に於ても、其の前提に用ゐる原則の性質に、深く注意せねばならぬのである。

演繹推理と教育 修身科の教授には、演繹法を用ゐる場合が多い。

例へば、一の格言を與へ、之に基いて、種々の場合に應用す可き方法を決定せしめるの類である。蓋し格言は古人が多く、の経験を積んで歸納したる一般の法則である。故に格言には權威がある。併し乍ら、其の中には、高尚に過ぎて、幼稚なる被教育者に理解し難いものもあり、且つ、今日に適切ならぬものもあるであらう。故に教育者は、假令演繹法に依つて教授する場合にも、よく注意して被教育者精神發達の程度と、其の境遇とに鑒み、最も適切なるものを選択ばねばならぬ。

(三)比論及び臆說 Analogy and Hypothesis (Analogie und Hypothese) 歸納演繹二法の直ちに行はれ難い場合には、比論或は類推(又類比)と名ける一種の推理法を用ゐる。比論は、即ち、或る事物の二三の點が、他の事物に似て居る故に、その外のすべての點に於ても、多分同一であらうと、推度 Inference. (Folgerung) する作用である。

臆説は、確實なる歸納法の斷案を得ざる間、或る事實を説明する爲に設ける假定の原理である。故に又假説と名づける。併し乍ら、臆説であるというて、随意に、空想を逞くしたものであつてはならぬ。必ず、實際に適合し、且つ、既に一般に認められた學説(Theorie)と矛盾してはならぬ。此の如くにして出來上つた臆説は、其の根據が確實である故に、實驗・觀察の結果、多くは歸納法の斷案と同一に歸し、終に一箇の學説として、承認せられるやうになるのである。

**比論・臆説の應用** 比論及び臆説も、適當に應用すれば、著しく、被教育者の觀察力を鋭くし、且つ、思想を精密にするの效がある。例へば、實物教授の際、被教育者をして、自ら二物の類似點を發見せしめ、之によつて全體を判斷させるが如き、又、或問題を與へて、之を解釋するに、被教育者に相當した臆説を立てさせるの類である。

考案

- 一 概念成立の實例。
- 二 概念の階級。
- 三 概念の内容と形式。
- 四 概念に由る精神經濟の例。
- 五 概念練習法。
- 六 判斷と推理との關係。
- 七 判斷と教育。
- 八 歸納法の實例。
- 九 演釋法の實例。
- 一〇 比論と歸納法との別。
- 一一 臆説と學説との關係。

第二十一章 情 操 (上)

情操 Sentiment (Höheres Gefühl) 情操は、抽象的概念に伴うて生ずる複雑なる感情である。故に、此の情は情緒の如く、直接に自己の利害に關する事なく、純粹に對象の爲めに感情を解發する。又その對象も、情緒の場合には、具體的に個々の事物を後據としたのであるが、情操の場合には、一層複雑にして抽象的なる後據を有する。例へば、真理の爲に眞理を喜び、善美の爲に善美を愛するの類である。情操の主なるものに、四種ある。智的・美的・道德的・宗教的諸情操が、即ちそれである。

(甲) 知的情操 Intellectual Sentiment 吾人が、若しも未だ曾て經驗したことの無い事物に接した時には、假令自己に直接利害關係のない物で

も之を異し、之を知らんことを欲求するのを常とする。此の欲求を稱して智識慾といふことは、既に前にも述べた。(本能の項参照) 科學は此の欲求に基いて生じたものである。疑惑 Doubt (Zweifel, doute) は、智識慾に満足を與へぬ一種の苦痛であつて、吾人は百方之を免れんことに努力する。是れ即ち、眞理を發見せんとする刺激である。さうして、其の目的を遂げ得たる時は、一種言ふ可らざる快樂を覺える。此の快感は、他の如何なるものとも異なる、特殊のものであつて、強度の著るしく大なるものがある。昔アルキメデイス Archimedes が、入浴中に己の發明に暗示を得た時、シラクエーシス Syracuse の市街を裸體の儘「吾發明せり」「吾發明せり」と連呼して疾走したといふ傳説は、此の感情が如何に強大なる刺激を與へるかを物語るものである。すべて此の如く、眞の爲めに眞を欲求するに由つて起る感情を總稱

して、知的情操(知情)といふのである。此の情は、新奇なる物に對して生ずる驚異 Wonder (Wunder, Eronnement 好奇心 (Curiosity (Neubegierde, curiositas) 等に由つて發達する。又此情は、あらゆる理智作用に伴うて發動する。或事を回想せんとして苦心し、回想し得て安慰するが如き、或は一事を判斷せんとして苦慮し、適當の判斷を得て満足する等は、何れも、此の情操の發現である。知情の美情及び徳情と異なる點は、前者は事實 Fact (Tatsach, Fait) の判斷に基き、後者は、價值 Value (Wert, Valeu) の判斷に基くことである。

知情の教育 凡そ智識の教育は、最初適當に好奇心を利用して、被教育者をして、智識其の物の爲に、勉學するの習慣を養成せしめることが、特に望ましいことである。決して席次若しくは點數等の爲に勉學せしめてはならぬ。是等は畢竟間接の興味 Indirect Interest (Mittelbar

Interesse) であつて、智識教育の補助たるに過ぎぬ。被教育者をして自ら苦心して、思考し、研究し、經驗して、事物を分明に了解し得た時の快樂の爲に、奮つて學事に心を寄せしめる可きである。是れが即ち直接興味 Direct Interest (Unmittelbar Interesse) を養ふ所以である。

(乙) 美的情操 Aesthetic Sentiment (Aethetischegefühl) 吾人は、日常自然物や人工物を經驗する時、直接の利害、又は實用の如何に關せず、唯其の色彩、形狀、音聲、運動及び是等に基いて構成せられた思想等より導かれて、温和にして比較的に永續し得る快感を生じ、特に多くの人と共に之を經驗する時は、一層其の快感を強める傾向がある。斯る感情が即ち、美的情操である。故に、美情は快感の一種であるけれども、直接の利害を離れ、それ自ら目的たるものである。例へば、滋味は快樂であるけれども、自己の生活に、直接の關係ある味覺の満足より生ずる

ものである故、美情と稱す可らざるの類である。併し乍ら、兒童及び未開人は、屢々美と快とを混同する。眞に美を理會して、之を愛するのは、或程度の經驗が進み、智識が発達するに至つて、生ずる現象である。

感情移入 *Empathy* (*Einfühlung*. *Objectivation du Moi*) 知覺又は想像の客觀的對象に、吾人の主觀的感情を投入して、其の完全なる統一を意識する作用を感情移入と呼ぶ。是れリップス *Lips* の主唱する所である。斯る心狀は、美意識に於て、最もよく現はれる。例へば、春の花を笑ふと見、秋の雨を悲しむと聞くの類である。これ花の咲き初めし知覺に由つて、自己の主觀的快感が、類似の聯合より喚び起され、その花の知覺に融合するのである。秋雨の場合も之と同様に、主客兩觀の間に類似の聯合が行はれて、悲哀を雨に投入するのである。

此の如き經驗は、單に冷なる態度で花を見、雨を聞くのとは大に異つて、温なる感情が主要素となつて居ることが分る。感情移入は、同情及び擬人法と似てゐるけれども、又自ら異なる所がある。同情は主として道德に關し、有情のものに専らに働き、擬人法は想像に基き、理智作用に由る。然るに感情移入は、其の對象の有情たるか、非情たるかを問はず、之に對して直ちに自己の感情を投入するのである。故に一に之を感情の客觀化ともいふ。時として、有情の人類の表情を對象とするを本來的といひ、無生物を對象とするを象徴的と呼ぶことがある。要するに感情移入も、聯合作用の一種であるが、普通の聯合は、表象相互のものであるが、此の場合には、表象と感情との聯合であつて、而かもその聯合が、極めて緊密である。又普通の聯合作用は、客觀的經驗の結果、主觀は比較的受動的態度に居るが、感情移入に在つ

ては、統覺が内部より發動的に感情を解發して客觀に及ぼすのである。

**趣味** Taste (Geschmack, Gout) 吾人が或る美的對象に對して之を鑑賞し之を批判する作用を趣味といふ。故に、趣味の主要なる作用は、美的判斷である。隨つて、趣味は精神發達の程度に應じて、高低の差あることを免れぬ。趣味の契機 Moment は、之を、感覺的・形式的・理想的の三種に分けることが出来る。(一)感覺的契機は視覺聽覺より來る快感である。(二)形式的契機は、觀察・比較等の作用によりて、感覺要素の排列の適否を判斷する作用である。(三)理想的契機は、更に、之に伴ふ理想の判斷である。(一)(二)は客觀要素であつて(三)は主觀要素である。趣味は、以上の次第を追うて進む。

是等の要素は、一は先天的素質に由つて、超驗的に美的判斷に資する

のであるが、一は後天的經驗及び教育に由つて發達するのである。

感覺的要素は、先天に屬するものが多く、理想的要素は、後天に屬するものが多い。形式的のものには、先天のものも後天のものも混じて居る。美的判斷を主として趣味を見る時は、道德上に於ける良心に比すべき作用であるが、それが先天後天の要素に基き、鑑賞及び評價の習慣に外ならぬ點より見れば、性格に比すべきものである。何れにしても、人格の内容として缺く可らざるものである。

**美の種類** 吾人若し春風駘蕩の日に、古の大宮人が櫻かざして遊樂せる狀を、巧に寫した繪畫を見るならば、美感の解發を禁じ得ぬであらう。斯ういふ對象に由つて起る美感は、優美 (Grace (Anmut, Grace)) である。又波浪洶湧巖突兀の光景に對したならば、凄然たると共に一種言ふ可らざる快感を覺える事があるであらう。是れ、即ち、壯美

(崇高美) Sublime (Erhabene) である。又戯曲・小説等に於て、不釣合な材料を巧に配合してあるのを見て、可笑味を感じるのは、滑稽美 (Comic (Kömische) であつて、悲しい中にも、美しさを感じるのは、悲壯美 (Tragische (Tragische) である。美に反して居るものをすべて醜 (Uglichs (Hässliche. Laideur) と云ふ。

(一) 優美 (Grace (Anmut. Grace) 優美の要素は、實質と形式(排列法)との二種に分けることが出来る。實質には形體(建築・彫塑・風景)・色彩(繪畫・風景)・音聲(音樂)・運動(舞踏)・思想(詩歌・小説)がある。繪畫・建築・彫刻の如く、空間的・視覺的・有形的の藝術を他の藝術と區別して特に造形美術 (Bildende Kunst. と呼ぶことがある。又形式には左の數種がある。是等の區別は、この美にも適用することが出来る。

(イ) 相稱(均齊) (Symmetry) 人類の身體に於ても、草木の幹枝に於ても、左

右對等なるが爲に、美を現はす場合が多い。

(ロ) 比例 (Proportion) 凡そ形ある物には、各部分の權衡がある。此の權衡を失つた物は、不格好たるを免れぬ。人體を畫いても、體軀に比して、四肢の大に過ぐるも、小に失するも、共に其の美を損するであらう。ツァイジング (Zeising) の創見に係はる黄金截(金截法) (Golden Section (Goldener Schnitt) は、この原理として立てられたものゝ一種である。即ち或る形體を二分するに、その小なる部分と大なる部分との比が、大なる部分と全體との比に等しいのをいふのである。

(ハ) 調和 (Harmony) 個々に檢すれば美なる物も、全體として調和せねば美を害する。又個々では美でない物も、全體としては好く調和して却つて美觀を呈する事もある。調和といふのは、美を形成する要素相互の關係が、一定の法則に由り、主觀的に統一せられて快感を生ず



ることである。

(二)多様の統一 Unity in Variety (Einheit in der Mannigfaltigkeit) 美的要素の排列は、如何に多様であつても、一定の統一を示す必要がある。假令、一見錯雜せるが如き物でも、其の間に統一を認める時は、美を感じる。之を多様の統一と云うて古來美の形式要素中の主要なるものとなつて居る。畢竟主觀の根本形式である所の統一に合致するが爲であらう。以上の諸形式は、どの美術にも必要であるが、繪畫に於て、特に著しく認め得られる。第七十圖は、有名なる伊太利の畫工ラファエル Raphael 1483—1520 の畫いた物で、あらゆる點に於て、形式美の模範であるとせられて居るものである。

(三)壯美 Sublime (Erhabene, Sublime) 美感の對象が、普通の美の標準を超越して大なる時、吾人は、之に對して初めは、不安、恐怖、抑壓等、多少不快の

ナンドマのルニアフラ 圖十七第



Raffael Santi. Madonna.

感を生ずる。併しやがて又、内部より對抗努力の契機 *Gegenstreben moment* が生じて来て、感情移入に由つて、その客觀的對象によく主觀的感情が融合する時、一種言ふ可からざる力の快感を解發する。所謂昂揚の快感 *Lust der Erhebung* であつて、是れが、即ち壯美である。故に壯美を感じるには、その對象に對し、自己の主觀に對抗力があつて、生命感情 *Lebensgefühl* が高まり得る者で無ければならぬ。兒童や婦女子中には、成年男子が壯美を感じる對象に對しても、恐怖して之を觀賞し得ぬ者もある。

壯美の形式的種類 *フォルケルト Volkelt* は、壯美の形式的種類を次の三種に分けた。

(一) 沒形式的 *Formlosigkeit*. 内容の力が形式を壓迫して、殆んど之を沒却するものであつて、之になほ左の種類がある。

(イ) 無限 *Grenzenlos*. 天空海濶等、すべて空間の際限なく擴大せられた場合には、之に對して壯美を感じる。

(ロ) 荒大 *Wild*. 嶮峻なる山嶽や、洶湧たる激浪の如く、内容の力が強猛なるが爲めに、形式は全く破壊せられたるが如き物に對しても、吾人は凄然たる中に、一種の壯快を覺える。

(ハ) 怪偉 *Kolossalisch*. 拮据たる巉巖の如き、突兀たる奇峰の如き、或は半天を蔽ふ妖怪の如き黒雲等、内容の力が殆んど無限なる如くに感ずる物は、最も強度の強き壯美を感せしめる。

(ニ) 奔出性 *Verwehenden Art*. 内容の力が形式の拘束を破つて、部分的に奔出する勢に對する時にも亦、吾人は壯美を感じる。是れは主として、藝術に於て現はれる。ロマンチックの詩歌には、この種の壯美

が少くない。

(二)嚴正的 Streng 形式が内容を拘束する力が現はれたものに對すれば、假令その大きさは普通若しくはそれ以下であつても、吾人は一種の壯快を覺える。人物にしても、豐臣秀吉やナポレオン Napoleon. の如きは、即ちその例である。

(三)自由的 Freiheit. 以上二種の結合したるが如きものであつて、形式は内容の奔放に調和し、而かも一種の快感を覺えしめるものである。是れも亦藝術に於て見る所である。ラファエル Raffael の畫には、此種の物が多い。第七十圖もその一例である。

(三)滑稽美 (Comie (Komisch. Comique) 或る對象に期待を以て注意し、精神の緊張して居る時、意外にも豫期に反して微小なる現象に對して、解發する急激の弛緩であつて、多くは笑の表出が之に伴ふ。所謂大

山が鳴動して鼠が三正現はれたといふ話の如きは、滑稽の共通的形式と見る可きである。優美壯美は、感情の中でも、快不快、興奮沈靜が主として働き、藝術のみならず、自然美にも之を認め得るけれども、滑稽美は、理智的要素に富み、その感情は緊張弛緩を主として、人工の藝術に於てのみ認められる。

又他の美は空間的排列が主となつて居て、對象の如何に拘はらず主觀は常に同一態度を持し得るけれども、滑稽美は、時間的經過を必要とする。假令滑稽なる繪畫の如き物に對しても、之を理解する主觀には、初に緊張し後に弛緩する時間的經過がある。なほ滑稽美には、自己意識の昂揚を要するが故に、その對象は微小なるを常とする。大なる物が豫期せざるに突發する時は不安恐怖を感じ、滑稽よりも寧ろ壯美の感を惹起するであらう。さればリップス Lipps. は滑稽

美の條件として「意外の微小」Das Überraschende kleine. といふことを擧げて居る。

滑稽の解發に關し、表象作用の過程に二種の重要な契機がある。一は緊張感を伴ふ困惑 Verblüffung. であり、一は弛緩感を伴ふ解明 Erleuchtung. である。前者には意志的契機たる期待を感じ、後者には幻滅を感じる。滑稽美は斯る複雑なる過程に由つて生ずる感情である故、その部分々々には不快感の伴ふ事はいふ迄も無いが、なほ綜合的には快感を覺えるのを常とする。若し同一の過程を取つても快感を覺えぬものは、その對象が滑稽たる資格に於て缺けて居るのである。

滑稽の種類 滑稽は之を(一)客觀(二)主觀の二種に大別することが出来る。

(一)客觀的 是れ即ち無意識的に滑稽である物であつて、特に滑稽を目的とした物では無い。之を更に次の三種に分ける。

(イ)外形的 Ausseren Erscheinung (□)性格的 Charakter (ハ)行爲的(境地的) Handlung (Situation) である。是等は、その名稱の表示する如く、容貌形狀等に於て、或は性格行爲等に於て異常であつて、滑稽の條件を具備して居るものである。

(二)主觀的 是れは故意に滑稽に言動するものであつて、機智はその主なるものである。

機智 Wit (Witz, Isaprit) は廣狹種々の意義に用ゐられるが、今之を主觀的滑稽の意義として解釋すれば、故意に或對象の缺陷・弱點・短所等、すべて微小なる部分を發見し指摘して滑稽感を生せしめることである。さればその理智的要素は一層重要となり、他人の思ひも及ばざる材

料を巧に應用して、意外の感に打たれしめるのである。

かゝる作用は言語に由る場合と、行爲に由る場合とがある。故に之を二種に大別して(一)を機智的言説といひ(二)を機智的行爲といふのである。(一)には誇張 *Karikatur*. 反語 *Ironie*. 擬詞 *Parodie*. 諷刺 *Satire*. がある。又一般に行はれて居る語呂合せの如きも亦機智言説の一種であつて、形式機智 *Formwitz*. と呼ばれるものである。此の場合にも意外の表象の聯合に由つて滑稽を感じるのである。往年我國に渡來した支那人に、この種の機智に富んだ者が居り、蟹の匂つて居る繪の浮き出してある茶釜を見て「茶釜が腹に蟹留まり」というて我國人の衆を博したといふことである。

笑 *Laughter* (*Lache*. *Rire*) 笑は滑稽の主要なる表出であるが、滑稽は必ず笑を生ずるとは限らぬ。又笑には滑稽に關係なく生ずるものが

少くない。今滑稽の表出としての笑を説く前に、笑の種類に就いて略説するであらう。

(一) 擦覺の笑 笑の最も簡單にして機械的なるものは、擦覺に伴ふものである。即ち平生保護せられて居る皮膚の表面に、他人の手指若くは柔かい外物が觸れて、軽く間歇的に刺激する時は、擦覺と共に笑を現はすを常とする。この場合には、血管運動神經及び交感神經の興奮・瞳孔の開張・眼の光輝・脈管の收縮等を來す。要するに擦覺の笑は皮膚の間歇的刺戟であつて、血管運動や呼吸に、間歇的興奮を與へて、快感と不快感とを交代に解發せしめる。併し大體上、快感の性質を有し、恐怖せる場合、若しくは疾病の状態に由りては、擦笑を發せぬ。一般に擦覺及擦笑は、性と關係し、女性に於て著るしく、特に青年期の處女に於て敏感である。

(二)神經的笑 覺官の刺激なく、中樞より自發的に起る笑がある。撲笑と區別して之を神經的笑と呼ぶ。すべて情緒が高潮した後には何の意味なしに笑の表出をなす場合がある。危険が經過して安心した時に發する笑は、その例とすることが出来る。スベンサア *Sven-Carl* は之を説明して、或種の目的の爲に緊張した神經力が、精神の弛緩と共に、急に最も抵抗の少い經路を取つて、顔面の笑筋を刺激するが爲であるとした。

(三)喜悅の笑 これが笑の最も普遍的のものであつて、嬰兒は、生後六七週より之を發する。この種の笑は微笑 *Smile* (*Lachen, Sourire*) が普通であるけれども、時としては聲を發して笑ふこともある。併し一般に哄笑 *Guffaw* (*Plötzliche Gelächern, éclater de rire*) は滑稽の笑に於て多い。

(四)滑稽の笑 前に述べた如く、緊張した期待が意外に微小であつた時に起る笑が即ち是れである。對象の不相應、不釣合等から此種の笑を發する場合が多いが是れ亦前の意外の微小と同じ原則に攝することが出来る。何となれば是等の關係は、毎に吾人を緊張せしむべき嚴格なる物と、之に不釣合なる微小若しくは輕易なる物との對比に由つて、急に弛緩の感を起さしめるからである。

笑の用 笑は一般に精神を發揚させ、筋肉の運動より延いて消化を助け、神經の緊張を弛緩して休ましめる効果がある。喜悅の笑は社交を助け、人の感情を融和する方が大である。嬰兒が微笑に由つて父母や保母は勿論、一般に傍人の愛を惹くことは著るしい事實である。喜悅の微笑を以て人に接することは、平和の要件である。作爲的ならざる自然の愛嬌 *Amiable*. (*Charming*) は喜の溢れる笑に由つて表

現せられる。又滑稽の笑は、所謂社會の硬化の *Stiff* (*Steif*, *Raideur*) を防ぎ或は之を矯正する爲に必要であつて、生活の緊張と共に、喜劇的藝術の歡迎せられるのは自然の勢である。

自然の笑は、此の如くに種々の方向に於て人生に必要であるが、他人に對する惡意よりする冷笑・*Sardonic Laugh*、嘲笑 *Sneer* の如き、或は他人の意を迎へる媚笑 *Adulatory Laughing* の如きは、何れも好ましからぬ笑である。又自己の小缺陷を指摘せられたるが如き場合に解發せられる笑は所謂苦笑 *Bitter smile* であつて、これ亦滑稽の一種に屬するものであるが、之に由つてその精神は、よく平靜を保ち得るのである。

(四) 悲壯美 *Tragic* (*Tragik*, *Tragique*) 悲壯は滑稽と同様に、人事に於てのみ認められる美感である。さうしてその感情の性質が複合的である。故に悲壯美は、或價值づけられたる大なる人物の苦惱に對して解發せられるのを常とする。若しもその人物の價值が小なる場合には同様な事實に對しても、單に悲傷 *Grief* (*Traurige*) を感ずるのみで悲壯の情とはならぬ。

然るに大なる人物に對しては、吾人は大なる期待を有し、感情移入に由つて自己の主觀に昂揚感を有して居る。然るにそれが、或運命の下に没落破壊せられる時、所謂精神的遏止 *Psychische Staunung* に由つてその人物に對する價值感情が非常に昂められる。斯くして一方には悲傷苦惱と、他方には昂揚崇高の感とが混合して解發し、不快にして快なる一種特異の感情である。悲壯に於ても、滑稽に於ける場合の如く、その過程中に、不快感の生ずることは、言ふ迄も無いが、全體として美一般の要素を包含して美感となるのである。

悲壯美は全體として抑鬱の感情が主となつて居る。何故といふに或偉大なる人物が運命に由つて没落破滅するといふ悲痛なる事實が、この美感の骨子となつて居るからである。その没落も、肉體の死滅は勿論、それにも優る精神的破滅の状態を眼前に展開せられれば人物の大に比例して、苦惱の強度が昂まるであらう。而かも之と共にその人物に同情し敬慕する主観は、強大なる昂揚感情を生じ、茲に兩者の對比に由つて、悲壯の感をますます昂めるのである。是等の感情は、固より假構的劇的對象に於て解發せられることが多いのであるが、實感に於ても、その對象との關係如何に由つては、この情の解發せられることは不可能では無い。

要するに、悲壯は個人の性格に由つて起るか、運命に由つて起るかの二種に歸する。悲劇に逢着すべき性格を有して、絶えず大なる危険

なる事業を企つるが如き人がある。所謂「亂を好む」の人は、その終末が悲劇に歸することが多い。之を性格悲劇 Character Tragic (Chakter Tragik) といふ。又謹直にして圓滿なる性格を有する人物でも、時として測らざる事より没落破滅に陥いることがある。斯く人力の如何ともす可らざるが如く思はれる事情より起つたのは運命悲劇 Fate Tragic (Schicksalstragik) といふのである。此の如く悲壯美には純然たる美感の外に同情・友情・崇敬・恐怖等、諸種の感情及び道德的批判等が加つて居る。

蓋し悲劇的事實は、人生動流の遏止であり、社會生活の硬化である。さうして喜劇は之を防ぐのである故、兩者は全く相反して居るが、人生には何れも必要なる感情であつて、共に缺くことは出来ぬ。併し乍ら、その深刻なる點より見る時は、喜劇は到底、悲劇の比では無い。



悲劇はいふ迄も無く、悲壯美の表現を目的とした藝術的創作であるが、その人心に感動を與へ、人をして反省せしめることは、その作の如何に由ること勿論であるが、概して深刻である。

(五)醜 Ugliness (Hässlichkeit, Laideur.) 一般的にいへば、醜とは美の反對であり否定である。従つてその對象に接すれば、快感を起さずに不快感を生ずる。併し醜は美に無關係では無い。同一美的意識の系統に屬して居る。感情移入よりいへば、消極的のものである。事實上自然に於ても藝術に於ても、醜が美に混在して居て、之が爲に美が對比的に強調せられることや、一の美體系中に醜の存在して居ることが少く無い。

又美的對象の内容を強調する爲に故らに形式の醜を擇ぶことがある。露西亞の小説には此の種の物が少くない。又特に平凡なる形

式を破つて怪異なる對象を創作し、この刺激に由つて、力の表現とする場合もある。是等は壯美悲壯美に於て認められる。要するに自然及び藝術とも、その簡單なる對象は、醜の存在せざる純粹の美のみを以て成立し得るであらうが、少しく複雑なるものとなれば、全然醜を排除することは、不可能であらう。

考案

- 一 情緒と情操との別。
- 二 知情の特質。
- 三 知情養成法。
- 四 美情の特質。
- 五 趣味の説明。
- 六 美の種類。
- 七 多様中の統一の實例。

八 美情と品性との關係。

九 壯美感養成法。

一〇 悲壯と滑稽との比較。

一一 醜とは何か。

### 第二十一章 情 操 (下)

(丙) 道德的情操(德性) Moral Sentiment (Sittliches Gefühl) 人類の社會には目的に關して善惡の表象及び概念を生じ、その目的の遂行に關して正邪のそれ等を生ずる。斯くして行爲品性の善惡正邪に關心する作用を道德意識といふのである。此の意識の發達に伴ひ、正善に對しては「爲すべき」刺衝を感じ、邪惡に對しては「爲す可らざる」刺衝を感じる。是れ即ち當爲 Oughtness (Sollen) であつて、道德的情操の核心をなすものである。即ち德情にあつては單に主觀的欲求のみならず、それが客觀的妥當性 Objective validity を併せ有する目的を、正しき方法に由つて遂行した時に起る主觀の満足と、此の當爲を遂行せざりし時に起る悔恨懊惱とを基調として、之を他の個人及び社會の行動に迄及ぼし、賞讃非難するに至るのである。德情は古來良心といへる語を以て言ひ現はされて居る。

良心 Conscience (Gewissen) 良心は古來倫理學上に種々の説明解釋があるが、今之を心理學上より廣義に解すれば、道德意識と異語同義に屬する。苟も一定の文化の進んだ社會に成長した者は、自己及び他人の行爲品性等に就いて、直覺的に善惡正邪の判斷を下し、その正善に對しては満足賞讃し、その邪惡に對しては悔恨非難する。さうして又事に臨んでは、正善と知れば之を行はざるを得ず、邪惡と知れば

之を止めざるを得ざる内部よりの衝動力を感じる。是等が即ち良心の作用である。

併し乍ら良心の作用は、他の精神作用と異つて、特別に存在するのでは無い。是れ亦社會的環境の經驗及び教育に由つて、次第に啓發せられたものである。此の事實は何れの社會に於ても、道德の起原が風習 Custom (Site, coutume) に在ることを以ても明かである。又倫理即ちエシックス Ethics の希臘語原エトス Ethos も、道德即ちモーラル Moral の拉丁語原 Mor も、共にもと習慣を意味する語であることを道德が經驗に由つて次第に發達し來つたものであることを證明する。要するに、良心は吾人の主觀が道德的現象を對象とする時に現はれる作用に名けたものであつて、個人の精神が社會と接觸しつゝある間に、漸次に發達するものである。

良心作用の分解 今良心の作用を心理的に分解すれば、左の如くなる。(一)善惡正邪の判斷をなすは、即ち良心の理智作用である。此の判斷が普通の場合には、殆んど思慮を要せず、直覺的に各人一樣に行はれるもので、良心を以て天賦的生得的であつて、何人にも同様に存するものであると斷定したのである。併し良心の判斷は各人一樣で無いのみならず、その價值も亦決して常に妥當では無い。即ち良心は判斷を誤ることがあり得る。是れ道德に理智的修養の必要なる所以である。

(二)又一旦判斷を下した正善に對して「爲さざる可らざること」邪惡に對して「爲す可らざること」を感じて、所謂當爲の意識よりその行動を促すのは、即ち良心の意志作用である。良心を以て神の聲であるといひ、絶對の命令であるといふのは、この意志的方面の衝力が強大

にして權威あるが故である。併し良心は何人にも一樣にかゝる權威を有するものでは無い。修養の足らぬ者又は所謂良心の痲痺したる者には、全然効力が無い。

(三)既に當爲の意識より所謂良心の命令に従つてその判断したまゝに行動した後は、満足するであらうし、或はその命令に背いて行動した後は、悔恨することもあらう。是れ即ち良心の感情作用である。故に良心の感情作用は、主として行動の後に現はれるのである。併し又、行動の前に於ても、判断に關し或は當爲の意識に關して、種々の感情が解發せられる場合もあらう。善惡正邪の判断に惑ふ所謂疑惑の場合、若しくは當爲を感じ乍らその行動を躊躇せる場合等がそれである。

以上説く所に由つて、良心は單純なる精神作用では無く、全く吾人の

全精神作用が、道德的對象に對する時の心狀であることが察せられるであらう。前に趣味を述べた時にも説いたやうに、是等は共に特殊の心力で無いことは明である。(美情の章参照)

**良心の發達** 人が他の動物と異なる點は種々あるが、良心の發達すべき遺傳的素質 *Anlage* を有して居るといふことも、その主要なるものゝ一である。良心その物を心理學上より考察すれば、全く生得的 *Congenital* で無いことは既に述べた通りである。さらばとて又全く一代の經驗 *Experience* で出来るものでも無い。全く人類が多少でも文化を有し社會的生活をして居る以上、長い間の經驗より道德意識の啓發せらるべき素質を有して居るが爲めに、之に基いて教育を受け経験を重ねるに隨つて發達するのである。今その次第を考察すれば、凡そ三段階を経て眞の意味に於ける良心作用の成立を見るの

である。

(一)習慣期 是れは兒童の幼稚なる間に行はれて、道德意識の基礎をなすものである。即ち幼兒の行動は習慣となり易く、一旦習慣となれば、之に従へば満足し、之に背けば不満足を感じる。その習慣には固より正善の傾向のものも邪惡のものもあらうが、一般には父母その他の人の注意に由つて、正善の習慣を得しめるやうに努める。この習慣に従ふことは、即ち他日良心の命令に従つて行動すると同様に、之に由つて心を安んじ満足するのである。併しその内容には何物も無い。幼兒の行動を支配する形式と力とが、良心と似て居るのである。兎に角他律的ではあつても、幼兒が無意的に正善の習慣に由つて行動することが、道德意識の根柢となるのである。

(二)命令期 兒童がやゝ成長して、少年少女期に進み、社會意識の次第

に啓發せられるやうになれば、環境から種々の影響を受けて、善惡正邪の直觀や表象が、次第に形成せられる。特にこの時期には直觀的模擬の盛んに行はれる時である故、示例模範が有力に兒童の行動に影響する。併しそれにも優つて、この時期の兒童の道德的意識の内容をなすものは、教訓であり命令である。蓋し少年少女は、一般に、判断批判の能力がまだ發達して居らぬ。随つて道德上の善惡正邪も判断するに由なく、唯父母長上の命令教訓に従ふ事が正善であり、之に背くことが邪惡となるのである。

故に兒童の教育上賞罰の最も有效なる時はこの頃である。試みにこの時期の兒童に或る事柄の善惡を問へば、日常普通の事に關しては、善或は惡を判然と答へるであらう。そこで更に進んで、何故に善なるかを追求すれば、必ず父母が善であるというたからとか、それを

すれば先生に褒められるからとかいふであらう。彼等には父母及び教育者の命令が正善であり、之に背反することが邪悪である。又是等の人から賞讃せらるゝ行動が正善であり、非難し懲罰せらるゝ行動が邪悪なのである。故に、彼等には全く客観的・他律的の権力に由つて道徳意識が成立して居るのである。

(三)自律期 命令教訓に對し、その制裁を恐れて服従するのは假令それが道徳律に適つて居ても、純然たる他律 Heteronomy (Heteronomie) である。命令期と並行し、或は是れより稍後れて、社會的制裁に對する關心が強くなり、之が爲めにその社會の認める善良なる風俗習慣秩序に服従する様になる。是れ亦他律的・道徳たることを免れぬが、これが反復せられて自己の主觀的習慣となるやうになれば、終には客観的制裁に對する關心より超越して、純粹に自己の主觀に於て或る

行爲に對し満足又は悔恨の情を痛切に感ずるに至るであらう。此の如く他の個人若しくは社會の毀譽褒貶如何に拘はらず、自己の主觀的判斷に由つて行動し制裁するのが眞の良心であつて、これは純然たる自律 Autonomy (Autonomie) である。道徳意識は此に至つて、その發達を完了したのである。

併し乍ら吾人の日常生活に於ては、純然たる自律的良心に基いて行動することは、寧ろ少くして、多くの場合には、世の毀譽褒貶即ち社會的制裁が共働して、道徳的行動を促すのである。示例・命令の如きも精神の發達と共に、その力を減するけれども、全く無關心であることは出來ぬ。されば良心は充分自律的に作用し得るに至つても、之に他律的要素の加はること多きを思はねばならぬ。

德情の特質 道徳的情操は、他の諸情操と異つて、次に擧げるやうな

特質を有して居る。

(一) 徳情は、科學的情操の理智を主とし、藝術的情操の感情を主とするが如く、意志的行爲を主として解發する。元來道德その物が人類の意志的行爲を對象とするが故に、之に基く情操も亦之に限るのは當然の事である。故に意志なき行動に對しては、その結果の如何に關はず道德的價値を認めぬ。随つて徳情の解發せらるゝことも無い。

(二) 徳情は實行的性質を有して居る。是れ亦他の情操に無き所である。吾人は眞と知り美と認めても、之を實行せねばならぬといふ刺激力を感じる事は無い。固より美の觀賞は創作に導くことがあるけれども、それは當爲の感から來るのでは無い。然るに徳情に於ては、當爲の意識が高調せられて、どうしても爲してはならぬとか、爲さ

ねばならぬとかいふ強迫性を有して居る。之を本務(又義務) Duty、Obligation (Pflicht、Verbindlichkeit、Devoir、Obligation) と名づけて、徳情の主要なる特質とするのである。

(三) 徳情は上述の特質より、直接に他人及び社會に影響を及ぼす點に於て、智情や美情と異つて居る。蓋し眞と美とは、之を認めて之に由つて快不快を感じるにしても、唯自己の主觀に止つて必ずしも當爲の實行感を伴はぬ故に、徳情の如くに、直接に他の個人や社會に影響を及ぼすことは少ない。固より間接には是等の情操も客觀に影響するが、徳情の如く直ちに實行力となつて現はれぬ。若しも美情が創作を促して、之を客觀に實現する時は、直ちに徳情の批判を受けねばならぬ。これ屢々美と善との衝突を見る所以である。

**德育** 道德の教育は、道德意識即ち廣義の良心の發達程度に従はね

ばならぬ。されば幼稚なる被教育者に道德心の萌芽を促す爲めには、善惡正邪等の區別を理解せざる以前より、善良なる習慣を養はしめることを第一とする。規○律○正○し○き○生○活○は○衛○生○と○共○に○道○德○に○も○必○要○で○あ○る○。從順及び自助の習慣も、早くより之を養はしめねばならぬ。次には道德的直觀を得しめる爲めに、幼兒の環境に善良なる示例を置かねばならぬ。蓋し幼兒は自然の本能に於ても、意識の性質に於ても、摸擬の最も盛なる時である故、自發的、機械的に善良なる示例を摸擬せしめるやうに導かねばならぬ。幼兒は人倫の關係に由つて、行動の認容範圍が異なるやうな事は分らぬ故、父母や教育者其他一般成人のなす事はすべて之を摸擬し之に慣れて、終には之を自己品性の要素に攝取するやうにさへなる。一般の人心は周圍の状況に動かされるものであるが、就中家族及び朋友の影響は最も強大

である。故に德育は學校教育のみでは到底不完全を免れぬ。常に家庭社會と連絡提携せねばならぬ。なほ學齡期に進んでは、公正なる命令教訓を以て外部より彼等の行動を規定せねばならぬ。この時期に賞罰が最も有效なることは、既に述べた通りである。賞罰を行ふに際して最も注意すべきことは、毎に公平を失はず感情に支配されずに、信賞必罰することである。それと共に、賞罰が兩親又は教育者の間に一致すべき必要がある。若しも或人は賞し或人は顧みず、或人は罰し或人は放置するといふが如く、制裁が區々である時は、兒童の意識に堅固なる善惡の體系を作ることが出來ず、徒らに個人的、具體的命令に由つて、區々の行動をなすに過ぎぬであらう。學齡期に於て、示例に由つて實際的善行爲を経験せしめると共に、教科に由つて道德的直觀表象を認識せしめ、終に道德的概念を形成せ



しめ、かくて各種の徳目に正確なる内容を充實せしめねばならぬ。之と共に交友及び一般社會の制裁が確實正當なることが徳情の養成に最も有効である。此の如くにして道德的概念が形成せらるゝに及べば、進んで自己及び他の個人の行爲品性に關して、道德的判斷をなさしめねばならぬ。批判力の缺乏は、やがて良心の不完全を表現するものである。是等の作用は一般青年期に於て高調される。随つて社會に存する道德法を認識し、自律的良心の成立するものも、青年期の特色である。徳育は道德的智識の收得と共に、堅實なる自律的良心の發動に由つて完成せられる。

(丁) 宗教的情操 Religious Sentiments (Religiöses Gefühl. Sentiment religieux) 人類が自己の意志の支配に屬せぬ勢力に對して、畏敬し歸依するのは即ち宗教的感情である。此の情も道德的情操と同様に、特別の精神

作用ではなく、唯吾人の意識が宗教的對象に對する場合に生ずる複雑なる作用である。さうしてその對象は、文化の程度や民族の歴史や環境の状態や、その他種々の事情に由つて變化する。是れ宗教に多くの種別を生ずる根本的理由である。

原始社會の人類は、宛も幼兒が現實と空想とを區分すること能はざるが如く、盛んに空想を畫き、之をそのままに受容して居たのである。而さうして彼等が生活上第一に驚異し畏怖するのは自然である。而かもその初に在つては、物心の別にも心付かず、唯そのままの自然を崇拜したのである。此の類が所謂素朴的拜物教 Naive Physiolatry である。それより物心の別が漠然と認められるやうになつてからは、種々の物に靈があり力があることを想像して、種々の崇拜が起つた。

咒物 Fetishism 偶像 Idolatry 性器 Phallicism 精靈 Spiritism 祖靈 Ancestor 死

靈 Necrolatry 及びトテム崇拜 Totem worship の如きは、何れも是等の物に超人的力を認めて之を信仰の對象としたのである。

以上の如き低級なる自然教に在つては、その宗教的感情も、直接に自己個人に關係し、對象も亦具體的である故、情操といふよりは、寧ろ情緒に屬するものゝ方が多いであらう。或る對象を恐れて、その祟りを避けるが爲にする祭禮・儀式等を主觀的に考察すれば、全く主我的情緒であると言はねばならぬ。純粹なる宗教的情操は、高級なる人文的・倫理的宗教に於てのみ認めることが出来る。併し乍ら、その對象は必ずしも佛教・基督教・回教・猶太教といふが如く、現在成立して居るものには限らぬ。ジエームス W. James は「能ふ限り廣く且つ一般的なる用語を以て宗教を説明すれば、眼に視えぬ秩序あること及びその秩序に吾人を調和的に適應することは、吾人の最高善の存す

る信仰より成るといひ得る」というて居る。此の意味に於て、宗教は人類に普遍であり、随つて宗教的情操の解發も亦文化民族には一般的現象であるといへる。

宗教的情操の特質 此の情操は、他の諸情操に比して、特に複雑である。人類が自然 Nature (Natur) を呼び、絶對 Absolute を呼び、實在 Reality (Realität) を呼ぶ所のものゝ力の宏大なることを知ると共に、自己の微弱なることを考へ、而かも自己の生命がこの大生命と關係あることを信じて之に歸依し、之に由りて生きんとする點より見れば、個人的・主我的情緒であるけれども、その對象が人類一般の運命に關する意味に於ては社會的・倫理的である。又その對象の性質を認識し、之に基いて起るものは、科學(哲學)的・理智的である。更にその優美・壯麗を感ずるは、藝術的・美的である。故に宗教的情操は、他の諸情操を包含

して之を統一して居るのである。その統一の主體は、即ち絶對であり實在であつて、所謂聖 Holy (Heilige, Saint) である。蓋し、諸情操は、畢竟、人類が文化價值 Kulturwert. に對する憧憬である。科學(哲學)の眞 Truth (Wahrheit, Verité) に於ける、道德の善 Good (Gut, Bon) に於ける、藝術の美 Grace (Schöne, Beau) に於けるは、何れもそれである。宗教は是等の價值を總合し統一して、聖なる對象に歸せしめるものである。さうしてそれは信仰 Faith. に由つてのみ可能である。故に宗教的情操の核心は、信仰にあらねばならぬ。信仰が宗教の生命であるといふのは、之が爲である。(思想と信念の項参照)

**宗教意識の要素** 宗教意識が人類に普遍であつて而かも先天的、本能的に存するといふことは、可なり古く且つ堅く信せられて居た。併し發生科學の進歩と共に、其の事實を否定し、人類の有する宗教意

識は、必ずしも普遍でなく、又その發達は後天的經驗に待つことを主張するに至つた。之に伴うて、兒童の宗教意識に關しても、本能説と經驗説とが對峙して居る。併し本能といひ經驗といひ、先天といひ後天といへば、一見著るしく相反して居るやうに思はれるが、宗教概念の見解如何に由つては、必ずしも一致點の見出せぬことは無い。**約說原理** The Principle of The Recapitulation. の見地からいへば、嬰兒や幼兒が、文化國の成人が有するやうな複雑なる宗教意識を有して居るとは認められぬし、又實際に兒童の精神生活に徴しても、斯る事實を發見することは出来ぬ。この點より見れば、宗教心は確かに本能的先天的で無いと言へる。併しそれは幼兒の精神に理性が無いといふのと同様で、成人の如く高い發達を遂げ、完成されたものが無いのであつて、その要素も無いといふのでは無い。無から有が生ぜぬ。

の論理の原則であるやうに、精神生活の事實に於ても如何なる作用も無から突然生ずるものではない。兒童の生の初に在つては、その精神生活は極めて單純であるが、その中から各種の要素が次第に啓發せられ、それが種々に結合して、益々複雑に進み、終には全く始に見なかつた現象をも生ずるに至るのである。併しその最高の發達を遂げた複雑なる現象でも、之を分解して考察すれば、極めて單純なる要素から成立して居る事が分る。宗教意識も亦その通りであつて、今日文化民族の成人が有する高い信仰も、その要素は先天的本能として、生の初より萌芽を有して居り、それが次第に發展し來つたのである。故に宗教意識も亦他の一般の意識現象と同様に、その要素は先天的本能的に存し、それが經驗及び教育に由つて、次第に高められるのである。

此の見解は、兒童の精神生活を觀察すれば、一層確實になる。蓋し、如何なる宗教でも、之を信する者の心中には、少くとも、恐怖・欲求・歡喜・信賴・愛慕・感謝の念を缺くことは出來ぬであらう。複雑なる宗教意識を分解しても、その主要素は以上數種の心情に歸着する。然るに兒童には、幼時より種々の形に於て、是等の心情が現はれ、その各が更に各種の經驗に由つて啓發せられ變化せられて來るのである。次にその状態を説明する。

(一)恐怖 Fear. (Furcht. Peur.) 既に本能や情緒の章に於て説いたやうに、恐怖は自護の消極的本能として、最も早く現はれる。すべて兒童の覺官に異様の感を與へるものは、この情の發發を促す。例へば大なる音響・見知らぬ人又は動物・暗い所・淋しい場所など、何れも彼等の祖先が屢々危険に遭遇したやうな經驗は、兒童に取つては、それが始め

てどあつても恐怖する。固よりこの種の恐怖が直ちに宗教意識を生ずるのでは無い。ヴェルギリウス Vergilius、やルクレシアス Lucretius がいうたやうに「恐が神を生じた」Fear begets gods. といふことは、大體に於て認容するにしても、唯恐ればかりでは宗教意識は成立せぬ。

されば、ヒューム Hume は、恐怖と共に、希望を宗教心の基礎であること説き、サバチエー Sabatier も「恐怖のみでは宗教心は起らぬ。恐怖を取り去り、救はれ得る希望が無ければならぬ」ことを説いて居る。是等は固より何人も異論の無い事であらう。併し乍ら、それにしても恐は更に畏aweに變じて、次第に宗教化されて來るのである故、兒童の現はす恐怖心は、家庭に於ても學校に於ても、大切に取扱はねばならぬ。この世に何物も恐る可き物の無い事を説いて、兒童に蠻勇

を養はしめるのは、理由なき物を恐れしめて、彼の精神を萎縮せしめるのと、その害は同様である。否、時としては恐れ無き人物の方が、獸性を發揮して世を害する虞がある。故に兒童教養の任に在る者は、人間靈性の最も貴ぶ可き謙讓、畏敬、服従、信賴等の起點たる恐怖心の處置に關しては、特に意を用ゐねばならぬ。

(二) 欲求 Desire. (Begierde, Désir.) 兒童は又盛んに要求する。特に學齡期は欲求時期とも名づく可き時であつて、各種の慾望對象が彼等の意識に充滿して、斷えず内部より欲求衝動を發する。かゝる欲求は、父母や保護者は煩に堪へずとして、屢々之を拒斥するのみならず、時としては懲罰して之を止めしめんとする程であつて、一般に好ましからぬ衝動と見做されて居る。併し、これ亦漫然と排斥することは、慎まねばならぬ。何故といふに、幼時に我儘なる無理なる要求をなし

て、父母を苦めた精神作用が、次第に淨化され向上され、方向を變じて祈禱 Prayer. (Gebet, Prière) といふ聖き表現となるのである。幼兒が恐ろしい物に出遇つた時、救を父母に求めるのは、日常何處に於ても見る現象である。而かもその要求を充たし得る力が父母に存することを信するが故に、之を呼ぶのである。

是れは、平日各種の要求を提出する場合も同様である。彼等は、到底、要求に應ずる力の無い人には、之を提出せぬ。父母が兒童を愛してその要求が正當なるものは、喜んで之を與へ、不當なるものは斷じて容さぬといふ習慣を附けて置いたならば、成長の後も、絶對者に理由なき不當の祈をなして之を褻すやうなことが無いであらう。祈禱は、實に宗教意識の主要素である。念々求めて止まぬ正しき祈が、人を安心させ向上させるのである。

(二) 歡喜 Joy. (Freude, Joie) 兒童が幾回要求しても容易に容されなかつた事が容されて、その目的を達した時に、彼の歡喜は頂上に達する。日常家庭に於て如何なる兒童も、日に幾回となく、かゝる事實に遭遇して、その歡喜を経験して居る。成人の複雑なる宗教意識に起る救濟 Salvation. の現象は、之と同種の心情である。解脱 Mukti. といひ、安心といひ、法悅 Ecstasy. といふのも、皆救濟の別名又は之に伴ふ心情の表現に外ならぬ。家庭に於て、或機會に兒童に與へし賞賜又は讚辭が動機となつて、彼が從來と全く異なる心情を生じ言動をなすやうになる事は、その例に乏しく無い。是れは宛も宗教的信仰に由つて救はれた者が、所謂再生 Palingensis. の人となつて、世界が全く新になるのと同様の現象である。

此の事を思へば、兒童の賞罰の忽にす可らざることが、いよゝ痛切

に感せられる。多くの宗教が、絶対者と個人との關係を説くのに、親子の例を用ゐるのは、單なる譬喩では無く、その精神内容の發達過程より見れば、親子の關係が先づ具體的原始經驗として存するのである。救濟の經驗は、やがて恩寵 Grace (Grade) の經驗である。親が自己を寵愛して恩恵を施して呉れることを自覺した時、子供は無限の歡喜を感ずると共に、深く親に信賴するであらう。

(四) 信賴 Reliance. (Vertrauen, Confiance.) 普通の場合に、兒童は父母に全き信賴を捧ぐるものである。兒童學者は、兒童の精神生活の一特徴として、輕信性 Credulity. を擧げるが、確かに兒童は多くの經驗を有し、屢々輕信の苦痛を嘗めた成人に比べれば、何事も疑はずに信じ易い。是れは兒童に限らず、成人に於ても、苦き經驗を有せぬ者は人を信じ易い。兒童の場合には、之と共に自己の無力が、成人特に父母に信賴

せしめる強い契機となるのである。幼兒は眞に謙遜に自己には何事も出来ぬことをよく知つて、父母兄弟の力を信じて、之に頼るのである。

固より初に在つては、無力有力などいふ意識は明かで無からうが、多少でも生の經驗をすれば、父母にさへ頼れば安全であるといふことは、早くより兒童の意識に現はれるのである。私の家兄は、曾て四歳の頃家が類焼せし時、「母に抱かれて乳を飲んで寢よう」と叫んだといふ事である。何といふいちらしき絶対信賴の叫であらう。私はこの事を回想する毎に、キリスト Christ. が天國に入る者は幼子の如くならねばならぬと説いた事を思ひ浮べ、當時の家兄の心を有り難くも亦羨しくも思ふものである。此の信賴がこの儘絶対者に移れば、無限の安心と、無量の強さを生ずるであらう。

(五)愛慕 Love (Liebe, Amour) 主他の情で最も早く現はれるものは愛である。兒童が母を愛慕するのは、その本能である。父に對しては、餘程理智的分子が加つて居るが何れにしても、兒童が親や保護者を愛慕するのは、自然の心情の發露として、最も人を動かすものである。愛は本能的感情であるが、之に刺激を與へて發芽せしめ成長せしめるのは、親の愛である。畢竟愛が愛を引き出すのである。さうして、親は自己の愛の反動として、子から酬いられる愛慕の情に由つて、更に一層強く子供を愛するやうになるのである。「神は愛なり」 *Der Gott ist die Liebe.* といふ語は、移して又「親は愛なり」といへる。或る意味よりいへば、人倫の關係は、皆此の愛の變形であるとも見られる。この大切な根本的心情が、生後二三ヶ月にして現はれ、其の對象が普通の場合に哺乳せしめる母であることを思へば、母の任の重大に

して尊貴なることが、痛切に感ぜられる。この場合にも、親に對する愛慕が、そのまま、絶對者に移れば、立派な宗教心である。誰か嬰兒に宗教心が無いといふか。嬰兒にも、宗教心の萌芽は明に存して居る。是れ亦恐怖以下の諸心情と同様に、家庭に於て最も注意して啓發保護に努めねばならぬ。

(六)感謝 Gratitude. (Dankbarkeit, Gratitude.) 感謝の念は恐らくは最も後れて發育するであらう。勿論文化社會に於ては、幼時より恩惠を受けた時に感謝の辭を述べる事を教へ、兒童は比較的早くよりその發表をする。併し多くの場合に、それは機械的であり、反射的であつて、眞の感謝の情は意識を占領して居らぬ。蓋し兒童は何か與へられた場合にも、その物に就いては直接に喜ぶけれども、それが何人に由つて持ち來されたかといふ因果の關係に心を寄せず、假令それが告げ



られても、その由來に就いては關心せぬ。唯眼前の喜悅の對象にのみ心を奪はれるのが常である。されば眞に衷心より施惠者を有り難く思ふのは、因果の關係に心を寄せるやうになつてからである。それには、少くとも學齡を待たねばならぬ。通常十歳以後に至つて、眞の感謝の情が明瞭に現はれる。この心情が現はれるやうになれば、宗教的心情も、たゞ要素たるに止まらず、次第に纏つたものとなるのである。兒童が親に對して感謝の念を生じ難いのは、餘りに始終接近して居て、恩を受けるのが習慣となつて居る故である。感謝の念の生ずる爲には、是非とも自己と對象とを分離せしめねばならぬ。然るに幼兒の場合には、之が難いのである。親が爲て呉れる事は、宛も自己が自ら爲た事の如くに慣れて、何とも思はぬのである。徴兵として軍隊に入つて、始めて父母の有り難味が分つたといふ者もあ

る。或は青年に達し外國に往き一人旅館に在つて衷心より親の恩に感じたといふものもある。これは父母の行動を自己のご分離し、自己今日の境遇と家に在る時のごを比較する爲に生ずるのである。**道德と宗教** 宗教の情操が諸情操を總合し統一したものであることは、前述の通りであるが、就中道德的情操とは特に深い關係がある。是等二種の情操は、その初に在つては異つた性質を有して居り、別々に發達したのであるけれども、文化的社會に在つては、その關係が親密であつて、殆んど分つ可らざる程になつて居る。即ち宗教は道德的修養に由つて、一層その信仰を高尙にし、道德は宗教的信仰に由つて、一層その性質を莊嚴にする。要するに、宗教と道德とは、種々の點に於て異つて居るが、その實踐的方面に於ては、兩者の一致する場合が多く、又互に助け合つて居る。

- 一 良心及び良心作用。
- 二 良心發達の次第。
- 三 徳情の特質。
- 四 徳育。
- 五 宗教的情操及びその特質。
- 六 宗教意識の要素。
- 七 道徳と宗教。

## 第二十三章 意志作用

意志 Will. (Wille, Volonté) 吾人が日常の事をなすには、習慣的に、特殊の思慮無くして行ふ場合が多い。併し乍ら、少しく複雑なる事に遭遇すれば、必ず思慮を運らし、自ら最も適當であると思ふ方法に由つて、

之を行ふであらう。是れ即ち、その初本能衝動及び習慣から漫然と解發した動作が進んで意志的行爲となつたのである。意志的行爲には、四種の過程がある。動機・思慮・選擇・決定が即ちそれである。動機 Motive. (Motiv, Motif) 凡そ行爲には、必ず目的の表象がある。この表象に快感が加つて、欲求衝動となつた時は、之を動機といふ。故に動機は、目的表象と快感との結合したものである。前者は動機の靜的要素であつて、後者はその動的要素である。動機は唯一なる場合のみで無く、種々の動機が同時に現はれて、互に相争ふことがある。思慮及び選擇 Deliberation. (Überleg. Delibération) and Choice. (wahl, choix) 親しい友が來て、その身の困難を訴へるやうなことがあれば、吾人は先づ之を救ふ可きであるか(第一動機)それとも救はずともよいか(第二動機)を考へるであらう。斯く二つの動機が意識上に動搖する状態

は、即ち思慮である。さうして最後に之を救はうと定めたとすれば、是れ即ち目的の選擇である。さて之を救ふにしても、種々の手段方法があつて、それが各々意識に現はれるであらう。之を志向 *Intention* (*Intention. Dessenin.*) といふのである。是等の志向に就いても亦、吾人は孰を選択すべきかを思慮する。思慮の結果、その何れかの一を擇ぶを選択といふのである。思慮と選擇とは、相伴ふを常とする。

**決定** *Decision. (Entscheidung. Décision.)* 思慮した結果、二種以上の目的若くは志向の中より、一を選択して、之を實現しやうと決すると、茲に決定の現象を生ずる。行爲 *Conduct. (Handlung. Conduite.)* は、決定の後に現はれる動作である。目的を執行せんとする最後の意志を、特に執意 *Volition. (Vollen. Vouloir.)* と呼ぶことがある。

**意志の兩面** 意志には、積極と消極との兩方面がある。吾人が一事

を執行する爲に、運動を起すのは前者に屬し、又一旦決定した事も、その場合が之を實行するに都合の悪いことを思ひ、行爲に現はさず、止めるのは後者に屬する。二者相待つて、吾人の行爲は全きを得るのである。日常生活に於ては、積極的意志が著しく注意せられるけれども、消極的意志に由つて、主觀的活動に終る動機志向の數は、極めて多い。吾人は之に由つて生の安全を保ち、社交の平和を得る場合、が少くない。忍耐 *Patience. (Geduld. Patience.)* は即ち消極的意志作用である。

意志は又、内外兩方面に分けることが出来る。外的意志は、外部に現はれる行動であつて、内的意志は、單に意識過程の作用に止まる。前述の消極意志及び一般に注意を有意的に緊張する場合等は、孰も内的意志の活動である。

意志と習慣 意志作用は、一般に意識的思慮的であつて、努力を要する。併し乍ら、同一の行爲が屢々反復せられる時は、習慣となつて、殆んど努力を要せずに、器械的に行はれるやうになることは、前にも説いた通りである。(習慣の項参照)是れ即ち、精神經濟の表現である。あらゆる精神作用中、意志は最も習慣の形成に適して居る。善意志が習慣となり、努力を要せずして善行をなし得るに至るのは、即ち德 Virtue (Tugend, Vertu) の成立したのである。

意志の教育 意志を教育するには、先づ身體を鍛錬せねばならぬ。隨意筋の中基本筋は意志の機關である。之を鍛錬して適當に發達せしめねば、意志はその作用を現はすことが出来ぬ。又知と情とを適當に修養して、意志の基礎を作らねばならぬ。最初に注意す可きは、動機である。被教育者をして、常に正しく、且適當なる動機を起さ

しめる爲には、目的表象に注意することを要する。(第一)には、彼等の智力に適當し、彼等の理會し得るものたるべきことである。(第二)には、その情緒に適當し、彼等の喜ぶものたるべきことである。(第三)には、道徳上有效のものであるか、少くとも無害のものたるべきことが必要である。さうして、目的の表象、即ち行爲の結果を豫想させて、之を得んとする感情刺激が、充分にその意識に起つたならば、次には彼等をして、如何なる手段に由つて之を得たならば、最も適當であるかを思慮せしめるべきである。少年少女期の動機は、概ね自己中心であつて、活動・權力・名譽の愛、或は競争心より動かされる場合が多い。青年に至つて、始めて輿論に關心し、若くは進んで全く自己の良心に従ふやうになるのである。教育者はよく是等の事に意を用ゐて、その正當なる發達を助く可きである。

**思慮の習慣** 兒童は一般に思慮すること少なく、漫然と衝動や慾望に従つて行動する故、特に適當の指導を要する。(第一)には目的を定めて、之を遂げるには、如何にして可なるかを各自に語らしめるがよい。(第二)には、斯くして得た答案を批評する。(第三)には、その中に就いて、孰の考が適當であるかを兒童各自に選擇させる。(第四)には、その選擇したものを、各自の決定として、實行させるやうに導かねばならぬ。さうして訓練の結果、最少の時間に最善に思慮し得るに至らしむ可きである。果斷は、斯くして得たる習慣の表現に外ならぬ。

**薄志弱行** 更に注意す可きことは、思慮の性質を正確なる理智的判斷たらしめて、一旦決定した事は、斷然決行するの勇氣を養はしむ可きことである。若し、思慮中に不正な感情が加はる時は、決定を弱めて薄志弱行の人となるであらう。されば平生正とし善として教へ

られたる事や、自己の知見 *Insight* (*Einsicht*, *Connaissance*) に於て、正當と判斷した事には、猶豫なく服從して疑はぬ習慣を得しめねばならぬ。假令既に實行しつゝある行爲であつても、一旦その非を曉つたならば、直ちに之を止め、或は又實現せんとする強い衝動をも、消極的に之を抑制する力を養はしめねばならぬ。斯くするには、被教育者に、よく教育者の命令・訓誨等の意義を理會させて、之に従ふこと、宛も自己の思慮・決定に由つて定めた事と同様にならしめねばならぬ。さうして一旦彼等が理會した上は、嚴格にその實行を促す可きである。

#### 考案

- 一 慾望と意志との別。
- 二 意志過程。
- 三 意志の兩面。

四 徳の成立。

五 意志修養法。

六 思慮の習慣。

七 薄志弱行の意義。

## 第二十四章 自我

自我 Self. Ego. (Selbst. Ich. Soi-même. Le moi) 上來說述した精神の諸作用は、宛も一種の外物に就いて研究したるものゝ如くであるが、その實は何れも皆自己心中の事である。何人も自ら反省し考察すれば、必ずその事實を發見し得るであらう。畢竟するに如上の各章は、分解的に各自の精神作用を記述したものであつて、自我はその總合統一に名づけたものである。併し乍ら、自我その物の何であるかは、古來

哲學上の問題であつて、或意味から言へば、一切の學問は、自我に始まり自我に終るといふ程で、つまり自我を明らめるのが、學問の目的であるともいへる。さればデカルト Descartes の如きは、すべての物を疑つたが、自己の考へるといふことは疑ふ事が出來ず、有名な「我思ふ故に我在り」*Cogito ergo sum.* の標語を確立して、これから出發した程である。考へるといへば、考へる主體 Subject. と考へられる客體 Object. との存在することは明な事である故、その考への主體を自我と名づけ、宛も意識の内容以外に獨立的に存在して居て、之を統一し之を支配するが如くに説明したのは、形而上學であつた。併し、心理學は科學である。飽く迄、經驗と事實とに立脚せねばならぬ。今科學としての心理學より自我を説明すれば、その客體は、身體を本として生じた感覺・表象・概念等、理智的要素より成り、種々にその

範圍を異にするが、その主體は感情に外ならぬ。

併し乍ら、元來感情はその性質が變化し易きものなるに、自我は古來人格同一 Personal Identity. と呼ばれたる如く、比較的不變に永續するのは何故であるかといふに、有機感覺に基く單情等が常にこの精神的有機體の基調をなして、此の上に落ち來る各種の刺激に對して反應するからである。この反應の快不快が、やがて現實自我意識の核心をなすのである。各種の心的經驗が意識の性質として互に結合せられ、その核心に感情反應の機能があつて、よく自我感が成立するのである。自我が連續し、自我が統一し、自我の行動が一貫するのも、畢竟意識に是等機能の特性を有して居る爲である。併し意識といふ特殊の存在があるのでは無く、各種の精神要素の機能に由つて現はれるのである故、詰り各精神過程に、自我感を形成すべき機能が

があるといつてよいのである。

身體の状態や意識の状態の變化した時に、自我意識の變化せられることは、屢々見聞する所である。内臓に於ける有機機能の變化したるが爲に、各種の變態的精神現象を生ずるものがある。憑依妄想 *Beseisenheitswahn.* を有する患者は、自分の内臓の或部分が憑依者の爲に喰はれたと信じ、或は自分が全く憑依者例へば狐となつたと思ひ、平生の自己と全く異なる言動をする者もある。又意識の變態の爲に、人格分裂を生じ、一人の自我の主體が二にも三にも分れることがある。之を以て見ても、自我の同一性や統一性が、有機機能や意識作用の状態に基くことが分る。

ジェームス James. は、知られるものとしての我、即ち客體的自我を経験我 Empirical self. と呼んで、之を物質的 Material. 社會的 Social. 精神的

Spiritual. の三種に分けた。(一)の中には、自己の身體は勿論、衣服・家族・家屋をも包含せしめた。是等は何れも皆自己に親しき感を有し、自己の一部分の如くになつて居るものである。又(二)は自己を知つて居る人の心中にある自己の認識が、更に自分自身の心中に反映したものをいふ。即ち知人の自己に就いての評價を意味するのである。故に毀譽褒貶は、社會的自我に屬する。(三)は意識の諸状態精神諸作用諸傾向の全集合を意味するもので、この集合體は、何時でも思想の對象となり得るものである。

ジェームズ James. は、又知るものとしての自我、即ち主體的自我 Subjective self. を純我 Pureself. と呼んで、經驗的自我に對せしめた。即ち自我は知られ考へられる精神的對象を離れて存在せず、且又思考意志等に伴ふ感情なくしては知ることが出來ぬにしても、是等の作用

を客體として考へるのも亦自我である故、之に就いて考察せねばならぬ。是れ即ち純我であり、思考者である。併し乍ら、之を靈魂 Soul. 超絶我 Transcendental Ego. 精靈 Spirit. 等の神秘的のものごせず、總合作用としての思想活動を言ひ表はすものごとした。さうして、純我は經驗我と單獨に存するのでは無い。意識に總合統一作用の存する所に、經驗我的心的經驗も生ずるのである。

**自我概念の發達** 何人も嬰兒の頃は、自己の身體と他の物體との區別が分らず、屢々身體を外物として取り扱ひ、或は之を打ち或は之を咬むことさへある。併し、その度毎に苦痛を感じるのみで無く、外物に觸れるのとはその感覺が異なる爲に、漸次に外物と自我とを區別するやうになるのである。勿論この時の自我は、身體的感覚・知覺若くは之に伴ふ單情の結合に外ならぬ。又外物は經驗の經過に従つて、



絶えず變化するけれども、自己の身體は常に同一に保たれ、實は代謝作用が盛んに行はれるのであるが、一々意識には上らぬ。且その活動より生ずる有機感覺も同一經驗を連続して反復するので、外物と自體との差異は、益々明になるのである。

併し乍ら、この際自我意識を一層明瞭ならしめるものは、他の自我の認識である。兒童は外形の差や刺激に對する反應の異なるより、生物と無生物とを區別し、更に動物と人類とを區別するやうになる。さうして、他の人類の言行と、自己の事を比較することに由つて、自我は一層明瞭の度を加へる。されば、兒童はその朋友と交はるやうになつて、自我意識が確立し、自ら一人稱の代名詞を用ゐるやうになるのである。父母や保護者に對しては、對等で無く、保護されて居る爲に、自我意識の確立する必要が無い。故に嬰兒の頃より自己の呼ばれ

つけて居る二人稱を、そのまま、自己の代名詞として居ることが多い。然るに、朋友と對等に交るに至つて、互の欲求の衝突等より、自我意識が強くなり、必要上一人稱を用ゐるやうになるのである。要するに、自我意識の發達も、理智生活の發達に伴ふので、その初は、感覺的知覺的に自我を意識する。この際には、前に述べた如く、自我は皮膚覺、有機感覺、視覺等の結合に過ぎぬ。さうして、視覺に基く要素は、常に身體のみならず、衣服裝飾等、凡て自己に屬する物が之に加はる。然るに、理智の發達が思想階級に進み、抽象的概念の形成せられるやうになれば、自我意識も亦多くの經驗より抽象せられて、複雑なる内容を統一する純然たる概念となるのである。此に至つて、自我は主觀的となり、一切の内面生活を代表する。之を後據として感情の内在することは、前に述べた通りである。

人格 Personality. (Persönlichkeit. Personnalité.) 自我が外物と自己とを分つ概念であるが如くに、人格は人類の自我と他の生物のとを分つ特殊の概念である。故に、人格と自我とは、元來同一主體の別名に過ぎぬ。唯前者は、自我に他の生物のそれと區別すべき條件の加つたのみである。然らば、その條件は何であるかといふに、之を心理的にいへば、思想階級に屬する理智的・情意的屬性である。是等の高き心的屬性を有する統一體が、主觀的に他の生物と區別せらるゝ所以の主なる作用を列擧すれば、左の如くである。

(一)内省的意識 Reflective Consciousness. 自ら自己の内面生活を省察し得ることは、人格成立の先行要件である。若しこの要件を缺いたならば、その他の事項は行はれぬであらう。幼兒の人格が不完全なのは、内省の不可能なることを主なる原因とする。

(二)統一 Unity. 過去の自我と現在の自我とを同一 Identity. のものと意識し、且現在複雑なる意識の内容を以て、一自我の活動に歸するのは、何れも統一の作用である。

(三)自己決定 Self-determination. 凡そ吾人が一定の發達を遂げた後は、その行爲の選擇は、全く自己の自由であることを感ずるであらう。假令外界より如何なる壓迫を受けても、之に従ふと否とは、一に自己の自由である。之を自由意志といふのである。吾人の道德的・生物的たる所以は、之があるが爲である。責任意識が人格の中心であるのも亦、自由意志に基くのである。全く選擇の自由の無い所には、責任も無い譯である。

人格の向上 之を系統發生的に觀ても、又之を個體發生的に察しても、人はあらゆる生物中、最もよく向上發展する者である。何處まで

も進まんとする強い衝動は、殆んど人類に特有なる天賦の性能であるが、その最も有力なる刺激は、理想 Ideal である。吾人は常に現在を超越したる完全なる対象を心中に畫き、之に到達せんとして努力する。是れは事實であると共に、又當爲である。さうして、その畫いた理想の實現せられた場合には、それは現實 Actuality (Aktualität, Actualité)となつて衝力を失ふので、更に一層高い理想を畫いて、之に憧憬する。此の如くにして、長へに進んで止まぬのは、即ち人生である。若し現實に満足して、理想の之を導くことが無ければ、人格は長へに向上發展することは出来ぬであらう。凡そ人物の高下、人格の尊卑等、人の價值に關することは、概ね理想の如何に基くことである故、その教養には特に心を用ゐねばならぬ。

自覺 Self-Awakening. (Selbsterwachen) 人格の向上には、自覺を必要とする。

自覺には、三種の段階を分つことが出来る。(一)は、人格の要件たる内省的意識を體驗して、或行爲或經驗を、自我の作用であり、状態であると、反省し判断することである。この自覺は、通常學齡期の後半に於て現はれる。凡そ吾人は内省に由りて、最もよく自己を認識し、正當に之を評價 Appreciation. (Wertschätzung) することが出来るのである。内省は、即ち反省である。反省の無い生活は、進歩の無い生活である。(二)は、社會上に於ける自己の地位關係を、明確に認識することである。自己の性質 Nature. 性向 Disposition. 能力 Faculty. 等すべて自己表現の正當なる評價は、この自覺に由つて可能である。又吾人は、この種の自覺に由つて、よく自己の社會的責任を曉り、新もき生活の意義を發見するのである。この自覺は、青年期に入つてより現はれるのを常とする。(三)は、自己と絶對との關係を認識することである。宗教上

の信念は、此に至つて確立する。自己(人格)は、實に、此の如くにして次第に向上發展するのである。

個性 Individuality. (Individuallität.) 自我の特殊性を個性といふ。之あるが爲に、主觀的には、一の統一的全體をなし、客觀的には自我と他我とを區別して、兩者相換へることの出來ぬものとなるのである。元來各人の精神作用は、大體に於て一致して居るけれども、その個々の部分に至つては、各人各様であつて、互に相異なるを常とする。之を人差(個人的差異) Personal difference. といふ。假令精巧なる同一の器械を用ゐてさへも、個人に由つて、その結果に差異のあるものであることを發見したのは、前世紀の初の事であつた。それは千七百九十六年グリニッチ Greenwich. 天文臺長マスタリン Rev. N. Maskelyn. は、助手のキンネブルック Kinnebrook. の計測が、自己のと異なる故を以て解職

した。然るに、約二十年の後、ベッセル Bessel. の發見に由つて、初めて人々の觀察に差異のあることは、普遍的事實であることが明になつたのである。

蓋し、吾人は異つた遺傳を禀けて生産し、異つた境遇に異つた經驗をして成長する者である故、互に相異なるのは、怪むに足らぬことである。個性の先天的要素は、能力 Capacity. (Fähigkeit, Capacité.) と傾向 Tendency. (Tendenz, Tendence.) とに分たれる。能力は將來發展す可き天分の多少をいひ、傾向は其の活動の發現する方向をいふのである。前者は、理智生活に於て、後者は、感情生活に於て、著しく現はれる。氣質 Temperament. は、之に基いて定められるのである。是等が相合して、天性 Nature. をなすのである。個性の後天的要素は、自然 Nature. (Natur.) と社會 Society. (Gesellschaft, Société.) との感化である。天地山川等、自然界

の影響は、前者に屬し、家庭・學校及び社會の教育の如き有案的教化及び社交・經驗等、偶然の影響は、後者に屬す。又吾人は、各種の運命 *Fortuna* (*Schicksal*, *Destin.*) の下に、各種の社會的經驗をなし、之が爲に個性に大なる影響を受けて居る。是れ亦、社會的偶然の教化に外ならぬ。是等後天的要素は、意志生活に、特に著しく影響する。性格 *Character* (*Charakter*, *Caractère*) は、之に由つて成立するのである。是等が相合して、養性 *Nurture* をなすのである。

稟賦 *Endowment*. (*Begabung*.) 先天に有する理智的特性を稟賦といふ。吾人能力の差は、稟賦に於て最もよく現はれる。感覺・知覺・記憶・想像・思想等の諸作用が、人に由つて異なることや、その能否・強弱の差は、稟賦に基くことが多い。個性に於ける理智的特性は、その根柢が稟賦に在る。

氣質 *Temperament*. 身體的傾向に基く感情の態度を氣質といふ。古來多血・胆汁・氣鬱(神經粘液)の四種に分けた。

(一)多血質 *Sanguine*(*Sanguinisches*, *Sanguin*) に屬する者は、反應が速く興奮し易いけれども、強度は弱くして永續せぬ。樂天的であつて、社交性に富み、活潑にして他に雷同し易い。

(二)胆汁質 *Choleric*(*Cholerisches*, *Cholerique*) に屬する者は、反應速く興奮し易く、強度は強いけれども永續せぬ。厭世的であるけれども、發動的であつて、命令者たることを好み、名譽心が強い。傲慢の爲に敵を作ることがある。

(三)氣鬱質 *Melancholic*(*Melancholisches*, *Melancholique*) に屬する者は、反應は遅いが強度は強く、一旦起つた感情は持続して移り難い。何事でも自己の關係して居る事を重大視して苦勞する。概して、厭世的受動

的であつて、不活潑である。

(四)粘液質 Phlegmatic (Phlegmatisches, Lymphatique) に屬する者は、反應は遅く、強度は弱いけれども、感情は變化し難い。活動を好まぬが、一旦始めれば永續する。怒る前に、先づ考へる風がある。一般に受動的にして、樂天的傾向を有して居る。

吾人は是等の氣質を單獨に有することは少く、概ね數氣質が混合して居る。唯或氣質の特に著しく現はれるので、區別することが出来るのである。氣質は、常に個人的に異なるのみならず、同一の人も、年齢の進行と共に變化する。例へば、幼時は多血質であるけれども、青年期には氣鬱質になり、壯年期には膽汁質となり、老年に及んでは、再氣鬱質となり、終に粘液質に傾くの類である。又兩性の差異や、種族の差異に由つても、氣質的傾向を異にする。

又一般に強度の強い氣質は、不快の情調に傾き易く、弱い方は享樂に傾き易い。又反應の速い氣質は現在に關心し、遅い方は未來に向ふ傾向がある。

氣質表

氣質	反應	興奮	持續	強度	傾向
多血	速	易	短	弱	快
膽汁	速	易	短	強	不快
氣鬱	遅	難	長	強	不快
粘液	遅	難	長	弱	快

氣質説の起原 昔希臘に、萬物は風・土・火・水の四元素より成り、是等の元素は、冷・温・燥・濕を有するとの説が行はれた。當時の大醫ヒッポクラテス Hippocrates (紀元前四六〇—三七五) が、之を人體の臓器に配當

して、各臓器は以上の性質を有する液の調和に由つて、健康を保つことの説を立てた。

氣質説起原表

元素の混合	臓器	液體	氣質
溫(火)―燥(土)	肝	黃膽汁	膽汁質
溫(火)―濕(水)	心	血液	多血質
冷(風)―燥(土)	脾	黑膽汁	氣鬱質
冷(風)―濕(水)	腦	粘液	粘液質

その後之に基いて、羅馬の醫師ガールン Galen (一三〇―二〇〇)が、四氣質の説を立てたのである。今日では、是等の説の根據は科學的に覆へされたのであるけれども、四氣質の名稱は、その儘繼承せられて感情傾向の分類に用ゐられて居る。特にヴントは、實驗心理學の立

場より、感情反應の差異を研究して、この名稱に新しい意義を附與した。

○性格 Character. (Charakter. Caractère) 練習に由つて、意志が一定の形式を有するに至つたのを性格(品性)といふのである。吾人が幼時より種々の行爲を反復する間には、多くの習慣を生ずるであらう。是等の習慣が、一定の道德主義に基いて形成せられたのを德 Virtue (Tugend. Vertu) といふ。道德的性格は、各人の有する德の總量である。性格は、常に道德的のみならず、意志の方向に従つて、種々の別を生ずる。例へば、各種の職業や、社會的・宗教的習慣の差異等に由つて、その性格に變化を生ずるの類である。併し乍ら、一般に性格を分ける時は、その強度に由つて強弱の別を立て、その性質に由つて、善惡の別を立てることが出来る。

性格と氣質 兩者は互に密接の關係があつて、實際には一の連續的過程として現はれるけれども、又之を區別することが出来る。氣質に於ては、情意は無意識的衝動的に現はれるけれども、性格に於ては思慮的・選擇的に現はれる。併し乍ら、意志は常に感情の先行を要するが故に、性格も亦氣質に影響せられることを免れぬ。比較的に是等の影響より獨立して、意志の一定形式に隨つて行爲するのは、即ち性格の強固なる者である。之に反して、一定の主義信念なく、感情に由り利害に由つて言行を二三にする者は、性格の薄弱なる者である。教育の目的及び方法 教育の目的に關しては、古來多くの説があるけれども、要するに人格の完成を期するに在る。換言すれば、人の人なる所以を完うせしめるに外ならぬ。さうして人格の要素及びその活動を知るには、心理學に待たねばならぬ故、心理學が教育學と密

接の關係あることはいふ迄も無い。

此の目的を達成する爲には、種々の方面に對つて、複雑周到なる注意を要する。身體の健全は、生存の要件である故、教育者は被教育者の體育に努めねばならぬ。又あらゆる精神作用を普遍的に成長發達せしめることは、人の人たるに缺く可らざる事である。本書に説いた知情意の作用を、兒童發達の程度に應じて充分に啓發せしめるのは、即ちこの目的を達成する所以である。知育・情育(美育)・意育(德育)の名目は、之より生じたのである。又體育に對しては、是等の三育を合せて心育(精神教育)というてよい。體育と心育とは、互に相關係して離れることは出来ぬ。體育が生理に基くのは、いふ迄も無いが、また心理作用と密接の關係がある。之と同様に、心育は心理に基くと共に、生理作用を忽にすることは出来ぬ。



個性養護 教育に於て、各人を全く同一に養成することは不可能である。加之、同一の時代に生まれ、同一の教育を受けても、各人各異の點があるのは、即ち自我の存在に必要なことである故、教育に於ては、最も個性を重んじ、漫りに之を滅却するが如き方法を取つてはならぬ。普通教育に於ても、被教育者の學力を平均せんとするのは、或程度に止めねばならぬ。絶對に、如何なる學科にも完全なることを強ふべきで無い。又氣質性格に關しても、教育者は自己に類する者のみを理會して、他を疎外するの弊を避けねばならぬ。個性の養護は必要であるけれども、それは個性に内在する價值あるものゝ謂であつて、漫然と自然的傾向に放任すべきでは無い。随つて又その偏傾して價值に乏しい者をば、之を矯正し補塞するの道を講せねばならぬ。個性の基く所は天稟に由るけれども、元來個性は

必ずしも絶對に不變なるものでは無い。鍛鍊に由つては、或程度まで之を改造することが出来る。是れ即ち、人に修養の大切なる所以である。

人格の完成 吾人は、世に立つて、必然的に種々の關係を有するものである。この關係の何れの方面に對つても、自我の存在を全うし、個性を確かめ得るに至つて、人格は完成せられるのである。吾人は、個人として自己の安全・幸福・發達・進歩を圖る可きは言を待たぬ。世界の人としては、世界人類の進運に寄與すべく、國家の人としては、我が家國運の益々隆盛ならんことに努むべく、又家庭の人としては、我が家族の安寧幸福ならんことを圖るべきである。要するに、吾人は到底孤立することは出来ぬ。共存共榮は、人類の普遍的目的である。さうして、是等の目的を達する爲に、吾人は必ず先づ職業の人とならね

ばならぬ。職業は人格の發現に缺く可らざるものである。抑も吾人が人として世に立ち得るのは、以上の各方面に關係を有するが爲である。吾人の人格は、是等の關係に由つて成立し、吾人は各々の自我の中に、是等の關係を結合する。斯くして身心ともに健全に發達し、あらゆる力をあらゆる方面に開展して、自己と共に人類全般の幸福と進歩とを助け得るのは、即ち完全なる人格であつて、教育の極致も亦此に在る。さうして、被教育者を導いて、漸次に此の理想の域に近づかしめるのは、教育者の任であつて、その方法は、心理學の指示に待たねばならぬ。

考案

- 一 自我の説明。
- 二 自我概念の發達。

- 三 人格の要素。
- 四 人格の向上と自覺。
- 五 個性成立の次第。
- 六 稟賦・氣質・性格の説明。
- 七 教育の目的方法と心理學。
- 八 個性養護の必要及びその方法。
- 九 人格完全の状態。

第二十五章 心理法

精神原理 以上に記したのは、文化の社會に生れ、健全なる身心を有せる成人に普遍なる精神現象の概説である。然かも、猶その對象は頗る複雑である。更に之に變態的精神現象を加へ、且一般に詳説すれば、その事項は實に無量に上るであらう。併しかゝる複雑なる精

神現象も、決して漫りに發現するのでは無い。仔細に觀察實驗すれば、皆一定の原理法則に従つて居るのである。物質現象を支配するに自然因果の法則があるやうに、精神現象には、又之を支配する精神因果の法則がある。是れ即ち心理法である。ヴント Wundt はこの法則を設定して、二種に大別した。關係原理と發達法則とがそれぞれある。

(甲)關係原理 Principle of Relation (Princip der Beziehung) 凡そ吾人の精神現象は、互に相關係して複合體をなし、之に由つて次第に複雑に進むのである。之を關係法といつて、三種に分たれる。

(一)總合原理 Principle of Resultants (Princip der Resultante) 一切の精神要素は、互に結合して、複雑なる精神現象を生ずるのであるが、その結合の結果として生じた現象は、要素とは全く異つた新しい性質を現はすのである。ヴントは之を心的結合の特色として創造的總合 Schöpferischer Synthese と名づけた。表象聯合・類化・想像・思想・作用・情緒・意志等の過程に於て、總合法の行はれて居ることを、特に著しく認め得べき事實は甚だ多い。

(二)分析原理 Principle of Analysis (Princip der Analyse) 分析原理は、總合原理の補助的原理である。元來是等の兩作用は、相待つて行はれるのを常とする。多くの心的過程が、全體に結合した場合に於て、全體が存在すると同時に、個々の要素も存在して居る。例へば、空間の知覺は視覺と運動感覺との結合であるが、空間の知覺と共に、是等の感覺も分析して意識せられて居る。而かも是等の要素は、全體の知覺から離れて居るのではなく、全體に關係して、その意味をなして居るのである。要するに、各要素は、互に有機的關係を保つて居るのである。

是れ即ち、相關的分析原理に従ふのである。

(三)對比原理 Principle of Psychological Contrast (Princip der Psychischen Kontrast)  
 分析原理が、総合原理の補助であるやうに、對比原理は又、分析原理の補助である。凡そ精神作用は、分析した個々の要素を對比せしめることに由つて、益々明晰を加へる。この事實は、感情に於て特に著しく現はれる。例へば、快不快に對比して互に益々その強度を加へるの類である。その他如何なる精神作用も、絶對に感情を含まぬものは無い故、この原理は、すべてに行はれて居るのである。

(乙)發達法 Law of Development (Entwicklungsgesetz) この法は、關係原理から生じて、精神の發達に應用せられる。元來精神は發達的のものであつて、個人の精神は勿論、精神の結合その物も亦、發達しつゝあるのである。その法則を精神發達法というて、三種に分たれる。

(一)成長法 Law of Mental Growth (Gesetz der Geistigen Wachstums) 吾人の精神作用は、生の初より死の終に至るまで連続して居る。熟睡及び假死の場合には意識は缺けて居るけれども、精神作用は行はれて居るのである。さうして、その過程は、結合の結果として、常に新なる内容を創造する。故に精神内容は時の経過と共に、絶えず増加して行くのである。之を精神成長法といふ。成長法は、総合原理の適用である。

(二)目的尠雜法 Law of Heterogony of Ends (Gesetz der Heterogonie der Zwecke)  
 凡そ吾人が行爲するのには、多くの動機たるべきものゝ中より、一を目的として選ぶのである。この點よりいへば、目的は分析的に選擇せられるといへる。然るに、精神は総合原理に由つて、その内容を増しつゝある故、吾人が行爲の目的とすべき動機は、益々多くならねば

ならぬ。この意味よりいへば、目的は総合的に進むともいへる。自然現象に於ては、因果は相等しい故、因に由つて果を豫定することが出来る。併し精神現象に於ては、因果は必ずしも等しく無い。随つて行爲の結果を豫定することが難い。時としては、思はざる結果を來すことがある。かゝる時には、吾人はその結果を更に動機として行爲することがある。例へば衣服は體温を保つ爲に被るのであるが、被て見れば、保温よりも裝飾として快感を與へた。それより裝飾といふことが衣服を作るの一目的となるの類である。この法は、分析原理の適用である故、又総合原理とも關係して居る。

(三)反對發達法 Law of Development toward Opposites (Gesetz der Entwicklung in Gegensätzen) 吾人が或微弱なる心理過程を有するに際し、それと反對の他の過程の生ずることに由つて、次第に發達し、終に反對なる他

の過程を凌駕するに至ることが多くある。かくして、反對に反對にと發達してゆくのが、反對發達法である。この法は、對比原理の適用であつて、目的尠雜法や精神成長法とも關係して居る。この法は、常に個人の精神發達に適用せられるのみならず、社會生活に於ても、或時期とその前後の時期とは、文化の状態に對比現象の多いのを常とする。

心理法と教育 此の書に説いた教育上の應用に關する事項は、皆以上の上の三原理と三法則とに則つたのである。教育者は、常に心に是等の原理法則を銘記し、之を以て被教育者を導くの方針となす可きである。特に総合分析對比の原理は、教授法の主義として、極めて重要である。又精神成長法は、兒童心理學の發達に由つて、益々明かになつた故、教育者は、須らく此の原理法則の應用に注意して、適當なる教

育を施さねばならぬ。目的尠雑法と反對發達法とは情意に關することが著しい故、品性の修養に應用することが出来る。例へば、初は殆んど目的なく、若くは單純な目的で行つて居た事も、次第にその高く深い意味を知らしめ、終に個人の行爲は、皆人生終局の目的達成に關係あることを知るに至らしめるの類である。又一時兒童に或惡傾向があつたとて決して失望したはならぬ。反對發達の法則を考へて、常にその對比的變化に注意すべきである。

考案

- 一 關係原理の説明。
- 二 發達法の説明。
- 三 心理法と教育。

心理學綱要 (終)

心理學綱要

大正十五年六月十日印刷  
大正十五年六月二十五日發行



金 二圓五十錢  
著作權所有

著者 高島平三郎

東京市京橋區南橫町十八番地

發行者 大倉廣三郎

東京市京橋區築地二丁目三十番地

印刷者 川崎佐吉

東京市京橋區南橫町十八番地

發行所 廣文堂

振替東京四六八四  
電話京橋五六六番

# 最新心理學叢書

心理學は教育其の他一切の仕事の基礎づけをなすものであるが、近代科學の發達に伴なつて發見され實驗された心理學上の數々の眞理や、多方面に分化發達した心理學の諸學說を知悉することは、專攻學者といへども頗る困難とする所である。本叢書は左記十二冊によつて最新心理學各方面の新事實と眞理と學說とを正確に叙述し、嚴正に批判し、其の實際的應用の進路を示したものであつて、各編悉く取材斬新、所說精細、斷案明快、而もよくコンデンスされたテキストである。されば縦に總覽すれば空前の一大心理學の大集成となり、横に通覽すれば個々専門の最新心理學講義となる。敢て教育家實際諸君の座右必備の名著として御愛讀をすゝめる。各冊選擇購讀隨意。中判二百頁の美本である。

東京高師範學校 田中寛一先生監修  
教授 文學博士

立教大學教授 蘆田正喜先生主幹

各	定價	壹圓貳拾錢
冊	送料	内地十六錢

- 第一編 精神分析學 前野喜代治先生著
- 第二編 團體心理學 山本 義夫先生著

- 第三編 兒童心理學 吉原 登先生著
- 第四編 精神科學的心理學 蘆田 正喜先生著
- 第五編 社會心理學 福島 經一先生著
- 第六編 犯罪心理學 大久保 勇市先生著
- 第七編 行動主義心理學 安藤 文郎先生著
- 第八編 學習心理學 千喜良英之助先生著
- 第九編 民族心理學 池原 茂二先生著
- 第十編 教育測定論 石川七五三二先生著
- 第十一編 宗教心理學 大武 美德先生著
- 第十二編 變態心理學 中村 行雄先生著

東京高師教授  
文學博士

田中寛一 先生  
監修

山本義夫 先生著

◆金一圓二十錢  
◆送料金十六錢

### 三版

# 精神分析學

意識と無意識

は交錯して心の表裏をなす  
而も無意識力の恐しき事よ

リップスが「無意識は心理的生活の一般的基底として受け容れなければならぬ。何故ならば無意識はより大なる圏として、其の中に小なる意識の圏を包含して居り、随つてあらゆる意識的なるものは無意識的なるものに其の第一歩を有してゐるからである。」といへるが如く、無意識の作用はより多く個人的人格乃至行動の原因となつてゐる。本書は著者がこの無意識を對象として研究されたものであつて、精神分析學の正派たるフロイド學派の所説は勿論、アドラー派、ユング派等の學説をも併せて解説されてゐる。教育家を始め心理的事實研究者の必讀書として愛讀をすゝめる

東京高師教授  
文學博士

田中寛一 先生  
監修

前野喜代治 先生著

◆金一圓二十錢  
◆送料金十六錢

### 四版

# 團體心理學

現實の赤い血潮が流れて動く團體心の諸相を研究し解剖し利用せよ

心理の研究といふ仕事の中でも團體心の心理作用といふことは最も直接に生きた人生の實際問題と深い關係交渉を有し、随つて最も具體的、實用的のものである。本書は著者が人間社會の生活活動の各種各相の實際的經驗的心理現象を把握し來りて具體的なる團體心の發現、作用、特長等を解説されたもので、教育、政治、軍事、工場管理、會社經營、商店經營、販賣商略など直接に團體を相手にする仕事並にそれ等の仕事に従事する人々に取りては勿論、歴史・道德の研究等にも亦必要な一つの最新科學である。幸に愛讀を給へ

振替電話  
東京橋本  
四六八番

廣文堂

東京市橋本  
八十八番

振替電話  
東京橋本  
四六八番

廣文堂

東京市橋本  
八十八番

振替電話  
東京橋本  
四六八番



東京高師教授  
文學博士

田中寬一先生監修

蘆田正喜先生著

◆金一圓二十錢  
◆送料金十六錢

# 新刊 精神科學的心理學

精神科學派に

依つて書換へ

られた最新最

進最深の心理

學を活讀あれ

本書は從來一般に行はれてゐた心理學に對して革命の導火を點じた最も斬新味獨創味に富めるものであつて、收むる所の要目、即ち

- 第一章 精神科學的心理學の概念(すべて三項)
- 第二章 デイルタイの構造心理學(すべて四項)
- 第三章 リッブス對象的心理學(すべて四項)
- 第四章 ナトルプの主觀化的心理學(すべて七項)
- 第五章 フッサールの現象學(すべて六項)

に依つて學的に組織立てられてゐる。これ心理學最新の學說、最深の創見、最進のタイプである。敢て教育者の座右味讀を望む。

東京高師教授  
文學博士

田中寬一先生監修

吉原登先生著

◆金一圓二十錢  
◆送料金十六錢

# 新刊 兒童心理學

子供の心身の

發達並に其の

精神作用を理

解して教育の

爲に活用せよ

金銀珠玉何物にも代へがたき子供、其の子供の心身發達の過程、特質並にその精神作用を知らないで、教育者、父兄等が成人としての自己の心を以て子供を取扱ふことは全く無謀であり危険である。本書は多年兒童心理學を專攻せられつゝある新進の著者が對象を兒童に求めて具さに研究せられたもので、收むる所、兒童の生物學的觀察、遺傳、人間の行動、兒童の遊戯、言語の發達、兒童の道德的關係、少年少女の缺陷、精神發達概説等類書に見るべからざる優秀な内容を有つてゐる。敢て教育者は素より父兄、學生諸彦の座右必備愛讀をのぞむ。

東京市京橋南 廣文堂 電話 五五五番  
東京市京橋南 廣文堂 電話 五五五番

東京市京橋南 廣文堂 電話 五五五番  
東京市京橋南 廣文堂 電話 五五五番

東京高師教授 文 學 博 士 田中寛一先生監修 福島經先生著 ◆金一圓二十錢 ◆送料金十六錢

# 新刊 社會心理學

個人の總和に非ざる社會の有する心理作用を闡明したる唯一の良書

人は國家を離れて生活し得ざるが如く亦社會を離れ孤立して生存することが出来ない。こゝに社會生活の必要が認められる。本書は此の社會生活の意識、目的、諸形式を個人の心的相互作用に依つて説明したものである。即ちあらゆる社會問題を完全に解決するには其の内に含まれてゐる心的要素の統制を以て其の端緒としなければならぬから、社會に於ける個人の心的相互作用の諸形式及び社會生活の客觀的諸形式とそれとの關係を攻究し、以て社會學並に社會科學一般の基礎を築いた必讀好著である。敢て社會人の愛讀と理解と適用を望む。

東京市橋本區南橋本四丁目八番 廣文堂 電話 五五八六 四八六四

# 四版 改訂 教育心理學

文學博士 文檢試驗委員 大瀨甚太郎先生著 ◆金五圓八十錢 ◆送料金廿八錢

教育事實への應用としての心理學を研究して教授訓練學習の効果を増大せられよ

心理學は教育、教授、訓練、指導、學習の基礎付けをなすと同時に又其の應用範圍の極めて廣汎なものである。本書は大瀨博士が専ら教育者のために教育的心理學の重要な諸問題を懇述されたものであつて、其主要な項目は  
第一編 總論  
第二編 心的經驗に於ける生理的條件  
第三編 心的經驗の構成及び機能  
第四編 學習心理の諸問題  
の四編三十二章より成り、其の斬新味に富める研究と、泰西最新の學說と、不偏穩健の主張とは實際家を裨益すること實に多大である。敢て愛讀を望む

東京市橋本區南橋本四丁目八番 廣文堂 電話 五五八六 四八六四

東洋大學 教授 高島平三郎先生著

菊判ポブリック製 函入美本全一冊 紙數三百八十頁

金三圓八十錢 送料金廿八錢

# 三版 實際的心理學

縱の方面の  
深さと横の  
方面の廣小  
さを兼ねた  
プラクチカ  
ルな心理學

改造途上の世界を觀るに、思想生活と實生活とは愈々親しく接近し握手するに至り、我が心理學は教育事實に對し、或は商工實業に、或は政治に、或は醫治に、或は軍事に對し、其の他人生の實際に向つて盛に應用されてゐる。本書は心理學界の最高權威たる高島先生が最新進歩の心理學の通俗化、應用化を企てられた全く新様式、新内容の實際的心理學であつて縦に進展せる學としての深さを横に進展させて其の廣さを示されたところは一特色がある。言葉を換へていへば、縦に飽くまで深さを増しつゝある現代心理學の最新知識を精細に研究し消化し批判し、その學理を極めて通俗平易の用語で何人にも解し得る程度に懇説し、更に之を教育その他日常生活の實生活上の事實に適用し説明された眞に唯一無二の良書である。教育者は固より家長、主婦、學生、官公吏、軍人、工場主、商店主等一般世人の座右必備愛讀をすゝめる。

東南市市橋 廣文堂 電話五五八番 四八六四

東洋大學 教授 關寬之先生著

菊判ポブリック製 三百六十二頁 寫真版四十圖入

金二圓八十錢 送料二十二錢

# 四版 最新 兒童心理學

學として  
組織も取  
材も所説も  
案も悉く斬  
新秀拔是實  
に最高權威

從來の兒童心理學の殆ど總べて泰西學者の著書の翻譯に過ぎないかの憾があり、是我が國に眞の兒童心理學が發達し進歩しなかつた理由である。著者は新進の兒童心理學專攻の篤學者であつて常に生きた兒童を中心として研究し、且内外に於ける兒童心理學の最新傾向に注意し、數年の長日月に亘りて材料の蒐集に腐心し内容の組織に新生面を開き、而も之を大學に於て實際に學生に講義し、更にその缺漏を補つて刻苦大成されたものである。本書の特色は全般に涉りて從來の古い兒童心理學の殻を破つて、そこに最新研究の知識を背景とししく組織立てられた所にあるが、併し精神生物學を背景とし之に行動主義心理學派の新潮を汲み、而して發育原理を以て兒童心理學を統合したところ、ここに一大特長がある。敢て此の良書を高等學校程度の學生諸君の座右にお奨めする。

東南市市橋 廣文堂 電話五五八番 四八六四



東洋大 學教授 高島平三郎 先生著

中判布製 金三圓五十錢  
函入全一冊 四百八十四頁 送料金十八錢

# 七版 兒童心理講話

兒童心理學 書中最も通俗 最も平易 入門書として 高評を受けてゐる

英國の詩人ウオーズワースは「子供は大人の父である。」と言つてゐるが、實に吾々は兒童から多くの事柄を教へられて居る。殊に兒童の精神と身體の發育や作用や變化並に其の教育との關係については兒童自身を材料として研究するより外に手段がないのである。本書は斯界の泰斗高島先生が科學の光に照しつゝ、兒童心理百般の事項を精密に研究されたものであつて、其の所説は兒童心理と教育との關係、胎兒期、嬰兒期、幼前期、(幼稚園期)、幼後期、少年期(小學校時代)青年期の大綱に分ちて其の心理を懇述してある。それ故、兒童の心が如何に發達し、又如何に働くか、隨つて如何に兒童を導き、養ふべきかといふ父母師長としての重大問題は平明懇切に説明されてゐる。是本書が類書中の王位を占むる良書として光輝を放ちつゝある所以、敢て愛讀をお奨めする。

東南 京市 橋八 廣文堂 振替 電話 四八六四 番六六五

醫學士 高峰博先生 新著

菊判總布製 金六圓五十錢  
裝幀頗優 雅函入美本  
全一冊 極上紙 一千頁 送料二十七錢

# 高評 夢學

夢の靈妙な 心理作用を 知りて之を 人事に應用 し活斷せよ

夢とは何ぞや、實に學界未開の興味ある雜問題である。本書は著者の熱心なる努力と該博なる研究とに依り生理學、心理學、精神分析學、教育學等の各方面より夢の起因、本質、種類、現象、作用等を解説し系統的に科學として夢の深淺度、五官の作用等肉醒、意識、潜在意識、夢中意識、睡眠の深淺度、五官の作用等肉體と夢の關係、感情、記憶、聯想、想像、時空の觀念、理性等精神と夢の關係、靈夢、吉夢、惡夢、小兒夢、性慾夢、魔夢、飛行夢、墜落夢、表徵夢等あらゆる夢と人生及教育との關係を説明し東西古今の異說新論を駁撃して夢の新學說を樹立し且神話、傳説、童話、童謡、小説、詩歌、俳諧等文學と夢の交渉を一々實例の世界的名著として出版界稀有の大好評を受けつゝある。

東南 京市 橋八 廣文堂 振替 電話 四八六四 番六六五

◇哲學概論の代表的最新副教科書

第五版

小さい哲學概論

中判布製函入  
二百二十二頁  
金一圓五十錢  
送料金十八錢

哲學とは何ぞや、此の問題は少くも自己の生活乃至人生に就いて何等かの疑惑  
と信念とを有する人に取つては實に必然の知的反省でなければならぬ。  
本書は此の問題を解決せんとする爲に書かれたもので、哲學上の諸問題及び其の  
思想發展の概観を懇説し、最後にカントを中心として發展された現代の哲學並  
に現代主要の思潮たる文化哲學の内容を釋明したもので、其の要目は、

序 說——哲學概論の目的、哲學の概念、哲學と科學、哲學と宗教、哲學の分

第一篇 認識論一般——知識の問題、知識哲學の概念、認識の本質（獨斷論、  
懷疑論、實證論、批評論）認識の起源（合理論、經驗論、批判論）

第二篇 形而上學一般——實在論、觀念論、現象論  
多元論、實在の本質（唯物論、二元論、同一論）機械論、目的論、  
哲學、宗教哲學）定命論、非定命論

第三篇 人生の問題——文化哲學の概念（倫理學、美學、歴史

であつて、而も著者が平素の哲學概論講義に於て學生に筆記の煩を省かしめる  
ことをも本書著作の動機となつてゐるので、其の叙述は平易簡潔、初學者は  
之に依つて哲學の概念、諸問題、主潮、支潮を理解し、以て人生指導の根本原  
理を思索、體驗することが出来、敢て哲學概論書中、最も要領を得た良書と  
して高等學校専門學校學生、師範學校上級生諸君の必讀をすすめる。

山形高等學校教授文學士 佐藤直丸先生著

東京市橋本町八番 廣文堂 電話 五五五番 東京市橋本町八番

525  
307

終